

地域創生への服飾デザインからの挑戦

－ 長門市油谷の棚田ブランディングと 農作業着モンペッコの商品開発を事例として －

The Challenge of Clothing Design for Regional Creation
- A case study on the Branding of Rice Terraces in Yuya, Nagato City and the Product
Development of Mompeikko for Farmer's Workwear -

水谷由美子* 小田玲子** 甲斐少夜子** 原田章子***
Yumiko Mizutani* Reiko Oda** Sayoko Kai** Akiko Harada***

要旨

本論は服飾デザインの領域から地域創生に挑戦する活動に焦点を当てたものである。2013年から本年までの3年間、長門市油谷をフィールドとし、棚田百選に選ばれた東後畑の棚田のブランディングに関わってきた。同時に、安倍昭恵内閣総理大臣安倍晋三夫人と山口県立大学企画デザイン研究室との共同研究により、農ガールコレクションとしてmompeikkoレーベルを立ち上げ、モンペッコ・サロペッコ2015を「アグリアート・フェスティバル2015」において発表した。

地域資源である柳井縞や玖珂縮の縞の伝統を参考に、やまぐち縞takijima 2015を素材として開発した。デザインはモンペッコ・サロペッコ2014のパターンに改良を加えた。山口県内各地やインターネットで実験的に販売も行った。

棚田の現状調査や課題を明らかにするための方法として、「日本一美しい油谷の棚田創生と若者による農業の未来」をテーマにしたシンポジウムを開催した。そこで自然栽培米を中心とする農業の個性化が行われていることや、若者が自然栽培農業に魅了されて向津具半島へ移住してきている現状が明らかとなった。持続可能な社会の実現を目指す、新しい価値を求めている若い農業者の創造的なエネルギーや、体験価値が高められるような服飾デザインをすることが今後の課題となった。

そのために今後は‘Zero Waste’の考え方に基づく、メッセージを表現するような服飾デザインを追求していきたいと考える。

Resume

This paper focuses on activities to promote Regional Creation from the field of fashion design. For three years from 2013 to this year, the team of Laboratory of Fashion Design and Planning at Yamaguchi Prefectural University has done fieldwork in Yuya, Nagato City, working on the branding of the rice terraces of Higashi-Ushirobatake, which was selected as one of the Top 100 Terraced Paddy Fields in Japan.

At the same time, through joint research with Akie Abe (wife of Prime Minister Shinzo Abe) to create the mompeikko (Japanese cotton working pants for women) label “Nou-Girl” (Agriculture Girls) Collection, we announced the products Mompeikko and Salopekko 2015 at the Agri-Art Festival 2015.

*山口県立大学大学院国際文化学研究所教授

**山口県立大学大学院国際文化学研究所2年

***山口県立大学大学院国際文化学研究所1年

In reference to the traditions of Yanai-jima stripes and Kuga-chijimi stripes, which are regional resources, we have developed Yamaguchi-jima takijima, and we added improvements on the pattern of the Mompekkko 2014 and the Salopekkko 2014. We experimentally sold Mompekkko at some places in Yamaguchi Prefecture and on the internet as well.

As a way to clarify the current situation of the terraced rice fields and plan for the future, we held a symposium themed "Creation of the most beautiful terraced rice fields in Yuya, Nagato City and the future of agriculture worked by young people".

At the symposium, it was shown that a major strategy in Nagato City is to grow naturally cultivated rice and at the same time, there is a trend in which young people are seeking to participate in natural cultivation agriculture and have thus emigrated from all around Japan to the Peninsula of Mukatsuku in the west part of Nagato City. It is a challenge for us to represent the creative energy of farmers seeking new values to further this movement, which aimed at the realization of sustainable society and to enhance the user experience. We should pursue fashion design expressing a message based on the concept of Zero Waste,

キーワード：アグリアート・フェスティバル2015 地域創生 服飾デザイン 棚田 モンペッコ 廃棄物ゼロ 持続可能な社会

Key words : Agri-Arts Festival 2015, Regional Creation, Clothing Design, Terraced Rice Fields, Mompekkko, Zero Waste, Sustainable Society

はじめに

山口県立大学企画デザイン研究室では、2013年から長門市油谷をフィールドとして、中山間地域活性化の事業に服飾デザインの分野から携わっている。そのスタートとなったのが、安倍昭恵内閣総理大臣安倍晋三夫人と始めた農作業着に関する共同研究である。棚田百選に選ばれた油谷の東後畑の自治会や長門市との繋がりができはじめた。

まず今回のモンペッコの商品開発までの経緯を述べることで、開発の段階を記しておく。第1回目のファッションショー「農業スタイルコレクション2013」^(注1)では、グローバルモンペッコを開発し、山口県に関わりのある国の生地を任意に集めて制作したが、量に限りがあり本格的な販売等には至らなかった。

2014年に一般社団法人おんなたちの古民家主催の田植えフェスティバルで、グローバルモンペッコが参加者に着用されマスメディアによって宣伝されたことで、田園に映えるモンペッコの魅力が知られるようになった。有機栽培米の田植えもあり、オーガニックな農業への関心がスタッフの間でも高くなった。

2014年モデルのモンペッコは田植えの後で、着用者へのインタビューや農林水産省で行われた農業女子プロジェクトに登録された女性たちの着用実験やアンケートなどを参考にデザインを改良した。また、素材に関しては地域資源である柳井縞や玖珂縮の縞や、長

年交流があり、サステナブルデザインを先行させているフィンランドの民俗衣裳の縞を掛け合わせ、機械織りのやまぐち縞raita2014を開発した。

第2回目のファッションショー「アグリアート・フェスティバル2014」にて発表された時、地元の購入者が最初のモンペッコ使用者となったので、まさに油谷からモンペッコは発信されたと言える。

政府のクールジャパン戦略でかわいい大使に選ばれた藤井リナと木村優が昭恵夫人の働きかけにより、モデルとして参加した。2014年のモンペッコ・モデルには2人のモデルが独自にコーディネートしたために、モンペッコに可愛い要素が加わった。

本来農ガールと言え、渋谷ギャル^(注2)や原宿のかわいい系^(注3)の女性との趣向の繋がりがあはずだが、筆者の研究室ではアパレル寄りの発想をしがちで、ファッションカルチャーとして登場してきた農ガールの趣向を表現しきれていなかったと反省をした。これは2015年モデルへの課題になった。

そこで、第3回目となる「アグリアート・フェスティバル2015」^(注4)では、モンペッコのみならずその他の作品のデザインにおいても、ディテールにおいて可愛い要素を入れるようにデザインディレクションを行った。

農ガールコレクションを通じて商品開発をすること、長門市油谷をフィールドとする農業および農業文化を表現する演出でアグリアート・フェスティバルを発信

するということだけでは、地域創生への確かな着地をもたらすことはできない。こうした反省の元、2014年の秋から収穫祭を企画し、長門市経済観光部農林課と連携し、地域の高校や自治会との共同で、稲刈りの行事を行い、同時に現状を理解し、課題解決に向けて何が必要かという課題を明らかにするために、アグリアート・フェスティバル2015およびその後独立して「秋の収穫祭とシンポジウム2015」（2015年9月23日）を実施した。

本論ではアグリアート・フェスティバル2015における農ガールコレクションの部門にて、商品開発したものの、また生活者の視点を取り入れて、いくつかの視点から開発した作品などについてデザインの発想や考え方を述べるとともに、どのような着用者の声が聞かれたか、また体験価値は高まったかどうかについて検証する。

また、2回のシンポジウムにおいて議論した長門市の農業とその6次産業化における課題と可能性について検討を加える。特に、油谷の棚田では長門市の方針で自然栽培米が植えられている点に着目した。従来とは真反対な農作業の仕方になる。収穫量は少ないが、新しい付加価値の可能性も生まれるかもしれない。こうした、議論に参画することから、新しい価値を表現することができる服飾デザインの方向性を見いだしていく。

1 服飾デザインから地域創生へ

(1) 地方創生とは

地方創生とはweblioによると「国内の各地域・地方が、それぞれの特徴を活かした自律的で持続的な社会をかたちづくること。魅力あふれる地方のあり方を築くこと。地方創生は第二次安倍内閣が掲げる主要な政策のキーワードとして用いられている。（中略）大まかに言えば、地方創生とは地域振興・活性化といったものを指しているといえるが、地方創生の定義やその意味するところについて、政府は特に画定させていない。農業、観光、科学技術イノベーションなどさまざまな起点が地方創生のあり方として想定されている。」^(注5)

地方創生という名称あるいは概念は、2015年には国家政策から大学の学部名や研究センターの名称あるいは地域と大学とのプロジェクト名などに使われ、現代の主要なキーワードになっている。従来から行われて来た地域おこし、地域活性化、地域振興などの概念の新しい政策として、地域創生という言葉が使われ始め

たものである。当研究室の活動は、このような政策が打ち出される約20年前から、地域活性化を目的として、服飾デザインの分野から地域の歴史や文化さらに人物や産業に焦点を当ててきた。以下では具体例を示して検証しながら、今回のテーマにおける課題を明らかにしたい。

以下ではまず、服飾デザインを通して山口県各地で実施した事例を検証し、多様な地域創生へのアプローチの可能性について述べる。

(2) 服飾素材としての地域資源を発掘

一般に服飾デザインの分野で地域創生を考えると、地場産業の振興がまず思い出されるだろう。山口県では江戸時代から継承され隆盛した柳井縞（主に柳井市）^(注6)は、大正時代に消滅し、今から20年あまり前に復興された。また、同じ頃に玖珂縮（岩国市玖珂）^(注7)も復興され、地域のまちづくりに活用されている。

また、アパレル産業において「ジャパンファッションデザインコンテストin山口^(注8)」では、デニムをテーマにした全国規模のファッションデザインコンテストが、山口県繊維加工協同組合が主体となり、産学官の連携にて行われ、県内のアパレル業界や専門学校および大学で知られてきた。このコンテストは2000年から2009年まで10年間、山口市で開催された。これがきっかけで、山口県が西日本一のデニム製品加工の中心地であることが地域内にも周知された。その結果、2006年に開催された第21回国民文化祭^(注9)においては、地域の行政、商工会議所、大学そして市民が山口市中心商店街を舞台として、デニムによる多くのプロジェクトを実施した。デニム製造は広島や岡山が有名であるが、山口ではデニム製品の加工地であることから、デニムファッションの発信基地として盛り上げようという試みであった。

アーケード内では、国民文化祭期間中にすべての店舗のディスプレイにデニムが使われた。当研究室（元衣造形研究室）は1994年からファッションショーを山口市内ではじめた。地域の産学公連携で、いくつかのショーを手掛けてきたが、これほど商店街の人々や市民が一緒に協働することが実現したのは、この時において他になく、国民的な行事がもつ意味と機能を目の当たりにしたできごとだ。

3年前からの研究創作では、地域間の資源の組み合わせや、伝統的な縞から新たな生地を開発、さらに伝統産業である徳地手漉き和紙などを組み合わせた新し

い服飾デザインを提案してきた^(注10)。

徳地和紙については、元徳地観光協会会長前田繁志氏の依頼により2011年から注目し2012年には「とくち夏祭り」における企画としてファッションショーを実施した。3年間地域の人々と徳地和紙の活性化に関わってきた結果、研究室から提案した2014年度活動計画が参照され、山口市が2014年に総務省から徳地和紙振興に関する補助金を獲得した。そこで、地域で本格的に徳地和紙を取り上げる組織として「山口とくち和紙振興会 結の香」が立ち上がり、研究室と共同で商品開発やワークショップをして、地域活性化に取り組んだ。その結果、2014年山口県立美術館にて展覧会を共同で行った^(注11)。

研究室では引き続き今年度も和紙を題材にした作品を制作している。

以上のように、当研究室では山口県における象徴的な服飾素材に関する地域資源として柳井縞、玖珂縮、デニムそして手漉き和紙に注目している。

(3) 歴史文化資源を発掘

次に、歴史文化や歴史的人物などと地域の関わりを地域資源とした活動について考える。筆者は山口に赴任してから3年間かけて、山口県の地域資源を調査した。その結果、まず山口市から活動を開始した。1997年から10年は「サビエルと大内文化」をテーマに、常栄寺雪舟庭、やまぐちサビエル記念聖堂前庭、SL山口号および山口市中心商店街などでファッションショーを実施してきた。

特に1999年から山口市中心商店街の中に産学官連携事業「やまぐち文化発信ショップNaru Naxeva」の空間を作り、活動したことが地域創生の大きなステップであった。山口県や山口市などの行政のみならず、山口商工会議所、山口市中心商店街の各組合、山口県デザイン協会、山口県繊維加工協同組合および市民との協働活動で運営した。

山口県立大学に大学院ができることがきっかけで、商店街の空き店舗対策、国際交流、地域活性化そして異業種の連携など、産学官連携の多様な目的が設定された。3年間事業の結果、有限会社ナルナセバが作られ、山口県立大学発のベンチャー企業として大学院生のビジネス的な実験の場としても機能している。

地域に貢献した歴史的人物への注目は、サビエルや大内氏のような中世へのまなざしだけではない。山口市阿東町にある長門峡を名所旧跡にした高島北海がいる。

高島の本名は高島徳三という。明治時代の人物で地

質学・植物学に造詣が深く、政府の役人であったが、後に日本画家になって地元に戻ってきた。そして、須佐や青海島とともに長門峡の地質学的な特徴を活かして、名所旧跡にした。当時は桜並木を作ったが、現在は紅葉で有名になっている。2007年には山口市阿東の観光協会から、「長門峡もみじ祭り」でファッションショーをしてほしいという要望があり、偶然、高島北海の偉業に注目していたので、「長門峡・北海・ジャポニスム」をテーマに阿東町の婦人会の協力を得て、合同でのファッションショーを行った。

プロにヘア・メイクされた婦人会のメンバーは自分の着物を着て、舞台上で堂々と発表した。この時、高齢者の積極性と意欲をはじめて知った。

(4) 歴史を服飾デザインで再生させる

萩市では、特定非営利活動法人全国晋作会連合会およびワンコイントラスト^(注12)の依頼により、奇兵隊衣装の再生を行い、全国に広くお披露目^(注13)をするために、2013年6月7日の奇兵隊発起の記念日に萩博物館でファッションショーの形式でメディア発表をした。この衣装は秋の時代祭りや演劇の衣装としても使用された。2018年に山口県は明治維新150周年を迎える。山口県のみならず、明治維新に関する研究やテレビドラマ、映画などが続々と発信されているが、この催しはその走りとも言える行事であり、多くのメディアに取り上げられ、地域をアピールする成果を得た。

明治2年に下関で撮影された写真に写っている7名の奇兵隊の衣服を再現するに際し、色や素材などは明らかではないので、再現というよりも現代的視点から再生する方法であった。

宇部市ではココランド山口において、地域の美容やウエディング関係者と共同でウエディングドレスに関するファッションショー^(注14)を実施した。新しい組織での活動で、意思疎通などむづかしい面も感じるショーになった。

服飾デザインに地域資源や地域文化のストーリー性を反映させることやファッションショーの演出にそれらを織り込むことで、地域との関係性が生まれてくる。流行とは別の、オルタナティブな服飾の価値や機能を追及する活動でもある。地域の文化や歴史は共有できる財産であり、地域の誇りを作品の中に盛り込むことで、地域の人々の心に作品が触れることができる。

(5) 長門市の地域資源と服飾デザイン

3年前から長門市油谷で実施している農ガールコレ

クションは、農業文化からの地域創生を目的にしたものである。長門市では主だった染織文化が継承されていないこともあり、山口県内の地域資源を掛け合わせることで地域の新しい価値観を表現するように工夫している。

新しい取り組みとして、長門の名産野菜をテーマにしたフリーハンドの絵をデジタルプリントを使って、長門固有のテキスタイルを創作した。この試みについては次章(5)で記す。

「柳井縞の会」とのコラボレーションとして2013年には長門市を代表する詩人「金子みすゞ」に注目した。金子みすゞ記念館所蔵の肖像写真から着想を得て、和紙糸を使った織物の企画をした。備後捺糸株式会社(福山市)の協力を得て、和紙糸の糸作りとオリジナルの藍染めが実現した。織りは柳井縞の会、会長石田忠男の参加を得た。オリジナルな糸作りからの作品制作であり、なるべくカットラインを直線にして、残り切れが出ないいわゆる廃棄物をなくす‘Zero Waste’の考え方でデザインした。プロダクトは匠山泊の岡部泰民代表であった。

以上のように、現在、地域で活躍している工芸や産業関係者とのコラボレーションも重要な地域創生の形であると考えている。同時に、発信活動が大切である。昭恵夫人との共同により、人と人とのネットワークによる新たな繋がりが広がり、従来には得られなかったプロとの共同の機会が生まれ、発信力が強まった。今回は特に、安倍晋三内閣総理大臣が農ガールコレクションにサプライズで参加した。地方創生を標榜している総理大臣自身から受けた「農ガールコレクションを油谷から世界に発信してほしい」という励ましの言葉は、我々を大いに勇気付けた。東京のメディアと地元メディアが各社とも共同で取材をしたので、山口から東京へ、そして東京から全国へ発信されたことは今後続く活動に意義があった。

以上述べてきたように、服飾デザインから地域創生への挑戦は、そのコンセプトにおいて、地域と地域の資源を出会わせ、組み合わせることを特徴にしている。今後はこちらも地域間の連携が可能にならないかと考えている。

ファッションショーと同時に、展示スペースを作り染織品や生活小物の創作をしている団体に提供し、ロビーでのブース展示にも力を入れた。観客とパフォーマーとの出会いに加えて、作り手同士の出会いにより、新しい創造的な機会も生まれた。

ファッションショーは、単に新作の衣服を見せる機

会にとどまらず、人と人、人との、さらに人と地域とを繋げる重要な機能がある。

(6) 今後の課題

ファッションショーを充実したものにするためには、音響・照明・舞台美術などに大きな費用がかかる。また、ヘア・メイクにも多くのスタッフの協力がいる。モデルの指導やリハーサルの時間も必要であり、モデルの拘束時間が長い。また、チラシやプログラムなどにも経費がかかる。モデルやスタッフへのホスピタリティとしてのアメニティも必要である。

ファッションショーを実現させるためには、多くの人の協力や参加があってはじめて成り立つものである。主要ゲストがボランティアで参加したことは幸いであるが、通常では多額の費用が必要である。それ以前に作品制作や商品開発には、費用が必要である。特に商品開発は糸の染色、生地からの織からはじまり、それらの実現可能なロットのボリュームは大きい。そのために、簡単には商品開発を実現できないことが多い。

幸いに2014年モデルに続き今回もまた新しい染織をして、生地から開発できた。そして、本格的な商品開発をして、実際に県内外にて販売実験を行っている。地域発の農ガールコレクションが地域を元気にする服飾になるとともに、全国の農ガールにどのようにして届けられるかが今後の課題である。

2 アグリアート・フェスティバル2015

(1) ファッションショーの概要

2014年の「大地の心をきく」からジャポニスム振興会(京都)^(注15)が主催者組織に入ったために、コンサートのパートを組み込むことになった。2015年では農業における日本の伝統的な精神性や文化などを表現するパートを取り入れるとともに、テーマ設定も日本人の自然との関わりや人と人、人とのなどの心の有り様を主題にするために、お茶の心である「和敬清寂」を全体のテーマとした。この精神は千利休も習った伝統的な茶道の原理である。

2015年は、前年のやまぐち縞raita2014のモンペ^(注16)スタイルをさらに改良した。その改善の視点は、プロモデルの藤井リナや原宿系雑誌モデルの木村優、ヴィジュアル系アーティストのKAMIJOらによるモンペッコの個性的なりメイクがよい影響を与えた。

アグリアート・フェスティバル2015^(注4)の企画では、農ガールコレクションのコンセプトに地域創生の考えを踏まえるために、「日本一美しい油谷の棚田創

生と若者による農業の未来」に関して、シンポジウムを行うことにした。その結果、安倍昭恵内閣総理大臣安倍晋三夫人、大西倉雄長門市長、松浦奈津子一般社団法人おんなたちの古民家代表がパネラーとして登壇し、水谷由美子がモデレータを務めた（写真1、写真2）。

今回は、プロモデルとして昨年に続きカワイイ大使木村優と日本ロリータ協会会長青木美沙子が参加した。2人のモンペッコアレンジは、昨年に加えさらに磨きがかかり、新しい刺激を会場の聴衆に与えた（写真3）。



写真1. トークショー
(左から水谷由美子 安倍昭恵 松浦奈津子 大西倉雄)



写真2. 大谷祥子 / 箏曲演奏 × 安倍昭恵 / 金子みすゞの詩朗読



写真3. モンペッコアレンジ
(左から安倍昭恵 青木美沙子 木村優)

農業がしたくなる服装と農業の魅力そして農業をする機会の創出のために、どのような環境を整えたらよいか、油谷棚田の自然栽培米に関する現状認識や、

将来の可能性、さらに農業の6次産業化への長門市の取り組みなどが課題であった。

このシンポジウムの出会いから、松浦奈津子のグループが長門市と組んで、新しい菓子の商品「和酒彩菓田楽庵長州ゆずきちアソート」が生まれた。関西のデパートのプレミアムカタログに掲載が決まり、現在販売されている。シンポジウムでの交流という出会いから地域間連携が起こり、その延長で起きたクリエイションである。

(2) モンペッコ2015とサロペッコ2015

①モンペッコサロペッコのデザインコンセプトと経過

2013年にモンペッコは誕生した。農作業着と言えば日本ではモンペが有名であり、韓国でもモンペ（몽페）が知られている。現在、モンペは農協やホームセンターで販売されているものが、農作業着として使われている場合が多い。価格的にも1,000円代から3,000円代で売られている。一方で、作業衣と同じように生活着として、あるいは日常の作業着として着用されている場合もある。最近久留米絣の本格的なモンペは8,000円代から15,000円代で販売されている。自然な生活を志向する若者に支持されている。

一般にインターネットを見ると、若者のカジュアルウェア、部屋着あるいはガーデニングなど、新しいライフスタイルに対応するようなデザインのモンペがいくつものメーカーから開発されている。

当研究室では、農ガールコレクションのための研究において、まず農作業を視野に入れて開発している。しかしながら、コストの問題もあり普段の生活やヨガ等のスポーツあるいは街着としても可能なように、デザイン、素材、パターンそして縫製などのプロダクト面で、いろいろな工夫をしている。

モンペッコグローバルでは、コスト面で農作業用として購入されることはむづかしいと判断した。当然、商品開発となると一着の用尺と織りロットの問題、開発のサイズやボリューム、カットの合理性、品質管理の問題、コスト計算、マーケティングなど多くの課題を解決する必要があった。

昨年、実験的に制作したサロペッコと呼ばれるサロペット形式の商品も、今年は地域のアパレル工場で少量生産をした。価格の問題があるが、評判は上々である。サロペッコの上半身の部分をなるべく体に沿うように設計して、農作業着ではあるがエレガントなカットラインを目指している。サイズ調整として、紐の肩の部分をゴムにしている点に特徴がある。

サイズはMとLの2展開にしたが、若干ボディコンシャスになっており、次に改良する場合にはもう少し余裕を入れる工夫をする必要がある。

②やまぐち縞takijima2015のデザインについて

やまぐち縞raita2014のテキスタイルは山口県の伝統織物である柳井縞・玖珂縮とフィンランドの民族衣装に見られる伝統縞とを掛け合わせた縞文様をデザインした。

そこで、このテキスタイルに対して新たに2015年の縞織の開発を行った。安倍昭恵夫人から日本の伝統文様を継承することは意義があるという助言があった。昔は地方独特の縞織が存在していたが、近年では地方の伝統織物が衰退し、織物に対する認識が浸透していない現状がある。

そこで、テーマの「夏は涼しく」を表現する縞の伝統を調査した。代表的な縞柄には千筋、万筋、みじん縞、二筋、棒縞、両子持大名などがある。その中でも滝縞には、暑い夏に目で「涼」をとる日本人の知恵が表現されているので参考にした。

そして、日本の伝統作業着「モンペ」を現代風にアレンジして作ったモンペッコは農業用であるために、農作業の大地と繋がる行為を敬う表現を掛け合わせた。自然界の数比列「フィボナッチ数列」という自然界の数美学と日本の伝統縞模様を掛け合わせ、美しさと涼しさを融合した縞としてやまぐち縞takijima2015をデザインした(写真4)。

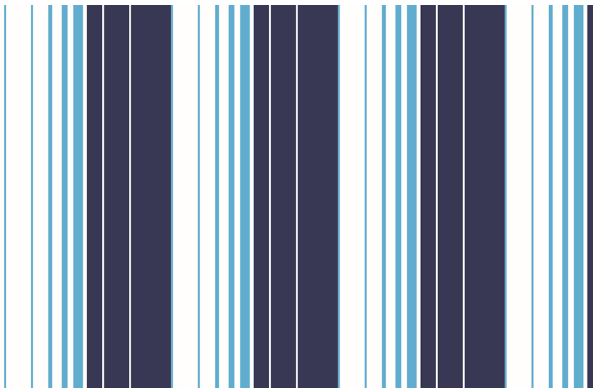


写真4. やまぐち縞takijima2015 プロトタイプデザイン

また、色に関しては、長門市油谷の東後畑の棚田の地域創生のブランディングを鑑みて、長門の自然の風景や印象から選択し、棚田に沈む夕日Hi(陽)、山から海へ流れゆき 磨かれし神秘Gyoku(玉)、広大な日本海 雲ひとつないSora(空)、楊貴妃が眠る深き紺碧Umi(海)、千年先も続いていく母なる故郷Mori(森)の5色とした。このような地域発のスト

リーを今後の6次産業化や米のパッケージデザインのコンセプトなどにも繋げて、統一した地域ブランディングとしてデザインしていく予定である(写真5)。



写真5. モンペッコ・サロペッココレクション2015

③モンペッコのパターンについて

モンペは元々、袴の形状を簡易にしたパターンから生まれたものであり、反物を使い切る構想で作られていた。しかしながら、昔ながらのパターンは、かなりゆとりがあり、現代のコンシャスな服飾に馴染んだ現代人の感性に訴えるには、一定のゆとりとコンシャスなシルエットを融合させるような改良や工夫が必要である。

モンペッコ2014は脇を直線断ちにした。腰の部分のゆとりを昔ながらのパターンから少し小さくし、裾もやや細みのデザインにした。モンペッコ2015モデルは、モンペッコの浸透を目的に、農作業着のみでなく、街着としての着用を考慮し、シルエットを細くしつつも、腰から膝にかけてもんぺとしてのゆとりの機能をぎりぎりのところで残す工夫を行った。

その結果、ヨガウェアや散歩着として浸透していく可能性が増した。

④モンペッコマーケティングについて

mompeccoの販売経路としては、サテライト研究室が設置されている有限会社ナルナセバを販売元として、県内数カ所のカフェ・雑貨店などの事業者へ委託販売として取引をしている。また、ナルナセバが一般社団法人おんなたちの古民家主催の田植え・稲刈りイベントで即売会を実施し、農作業着としてのモンペッコの浸透を促している。同様に、7月に申請した山口市マーケティング支援補助金の認定を受け、現在mompeccoレーベルの商標登録の申請中である。また、11月にはウェブサイト及びオンラインショップを開設した。<http://mompecco.com/>, <https://mompecco.stores.jp/>

ウェブサイトのイメージとしては、ヨガや散歩にも着用するモデルで、農作業だけでないモンペッコの使用例をわかりやすくしている（写真6）。

10月末から11月初旬にかけて実施された山口県立大学グローバル事業の海外フィールドワークでは、パリ、ヘルシンキおよびロバニエミで研修する学生にモンペッコやまぐち縞takijima2015を旅行着として着用する依頼をした。そこで、着用感や海外での反応を検証した。目立つ色で仲間を見つけやすかったという意見や、飛行機の中で着用した場合、窮屈でなくリラックスできて良いという意見もあった（写真7）。



写真6. モンペッコポスター



写真7. モンペッコinパリ（ルーヴル美術館）

2015年11月初旬には東京で営業活動を行い、2014年に農林水産省の農女子プロジェクトに協力した際の繋がりで、農林水産省経営局就農・女性課にもモンペッコを紹介した。また、メイドインジャパンのモノづくりに拘った地方産品を取り扱う「日本百貨店」との取引交渉を行い、2016年1月におかちまち店にて販売イベントを実施した。その他、代々木上原のCASEgalleryにて2016年2月に展示販売会を開催した。東京進出に当り、来年度のモンペッコモデル改良に向け、購入者の年齢層の把握や意見収集を実施し、カスタマー志向のパターン作りに活かしたいと考える。

3. その他の農ガールコレクション

(1) 「和敬清寂」テーマ作品

アグリアート・フェスティバル2015のテーマである「和敬清寂～夏は涼しく～」のコンセプト表現として、モンペッコパンツに合わせ、地元長門市油谷に移



写真8. 和敬清寂のテーマ
徳地手漉き和紙×カリグラフィー×ファッション



写真9. 和敬清寂のテーマ ○(まる)作品 帯をはずしたスタイル

住した書アーティスト 堀之内健の協力のもと、山口県徳地の手漉き和紙に和敬清寂の文字を書にし、農耕文化が定着した弥生時代の衣服、貫頭衣を参考にデザインした。これは、60×90cmのサイズの和紙を切ることなく、最大限に利用した。そして腰紐には、夏の涼しさを演出するために、高音で涼しげな音色を奏でる、リユース素材としてのPCパーツのリングを使用した。これらは‘Zero Waste’の精神に基づいたデザインである。また和紙に蒟蒻芋の粉と、寒天を二重で塗布することで強度を高めた。このように天然素材を使用することで、自然と共存するライフスタイルへの浸透を促していくことが重要であると考え（写真8、写真9）。

(2) 3世代健康スタイル (担当：小田玲子)

昨年より、「3世代NORAスタイル」というテーマで、家族のための農作業着を提案している。前は家庭に眠っている古着を活用して、時代を超えて受け継がれる布の温かみを家族の絆に活かした作品を発表した。今回はそのコンセプトを発展させて、「3世代健康スタイル」というタイトルで、健康的なライフスタイルを目指す家族のための農作業着を制作した。

前作品で藍染に出会ったことで、体に良い染料で染めた服を身につけることの大切さに気づいた筆者は、今年の5月から8月にかけて富海の藍染作家のアトリエに実習に行き、藍染体験をする機会を得た。そこで、見た目にも涼しげな藍染を取り入れたコーディネートにしようと思った。また、藍の葉は古来より薬効があると言われていたことから、健康や安全のシンボル、絆を強くするお守りとしてデザインの一部に組み込むことにした。

また、健康に関心のある人はスポーツにも関心があると予想されたので、スポーツシーンやちょっとした外出にも対応できるようにした（写真10）。

「3世代・祖母」には、若者に人気のサロペットスタイルで若々しさを表現した。テニスに興味という設定のため、帽子はサンバイザー風。アームカバーの赤は、棚田の夕日から想起した。

「3世代・母」のTシャツは、緑の太陽をイメージしたものである。ズボンは軽快なブルマー風にした。これは昨年のコレクションに出演したプロモデルの藤井リナがモンペッコを同様にリメイクしていたことにヒントを得た。日差し対策として、薄い麻でポレロを制作した。レモン色にしたのは黄色が紫外線を通しにくく、藍染の色と相性がよかったからである。



写真10. 「3世代健康スタイル」 小田玲子 デザイン・制作

「3世代・孫」のズボンはツヤのあるデニムの表裏を使い、母親とお揃いにした。孫モデルは昨年この型のズボンを気に入っていた。モデル自身がジャズダンスを習っているため、帽子はストリート系のデザインにした。ブラウスは筆者の晒しの腹帯をリメイクしたものである。

今回制作してみて、本藍の布と現在のデニムの相性が良いことがわかった。最近、本藍の布を見ることは普段では稀である。その深い色の美しさに気づいた人も多くいた。改めて、本物の良さに触れることの大切さを実感した。

3世代の家族のライフスタイルの表現は、昨年に続き地域の人々から好評であった。地域の豊かな暮らしや家族の繋がりを服飾デザインでさらに発展させていきたい。

(3) 補助具としての「米刺し」のある農作業着 (担当：原田章子)

農ガールコレクションにおいて、農作業着の補助具として、伝統的かつ機能的であり「可愛い」をイメージさせる「米刺し」のある農作業着作品2点を制作した。補助具とは、腕抜き、エプロン、手ぬぐいのほか、麦わら帽子（素材：経木）で、農業を営むために欠かすことが出来ない4点のアイテムである。

デザインワークのために、防府とくち農業協同組合西部営農センターの協力で、バラ農園、大道スイートローズ（山口県防府市大道）を訪れ、現地調査を行った。

刺し子について、筆者は2011年の東日本大震災をきっかけに東北地方の伝統工芸である刺し子に興味を持って活動をすでに行っていた。今回のコンセプトワークのために改めて刺し子と農作業着の歴史をも調査した結果、農作業着としての補助具の素材は、丈夫



写真11. 「米刺し」のある農作業着 原田章子 デザイン・制作

なデニムにし、補修、補強、保温等の機能をもつ刺し子を装飾としてデザインした(写真11)。刺し子の模様は、五穀豊穡の意味をもつ「米刺し」を選んだ。色は、青系と赤系の2色。月と太陽、陰陽をイメージしている。

腕抜きについては、丈の長短2タイプで仕事のシーンで使い分けることを意図した。デニムは通気性に欠けるため、腕抜きの内側にメッシュ生地を付けて通気性を確保した。

エプロンについては、胸当てのあるものと昔の農作業着という「前だれ」の形態を用いた。真田紐を使用して花ハサミをひっかける部分を設けた。ポケット部は、大型の携帯電話も入るサイズにし「米刺し」をほどこした。肩・腰紐にも真田紐を使い、伝統的なイメージを表現した。丈の長い「前だれ」タイプは、エプロンの真中より下方へ切込みを入れることで歩きやすいようにした。

豆絞りの手ぬぐいをもとに、ほっかぶりを作った。だれもが簡単に手縫いで作れること、日焼け防止、顔の保護、汗取り効果、「可愛い」も意識して作った。子孫繁栄を表す豆絞りに、「米刺し」をすることで五穀豊穡の祈りもこめた。

麦わら帽子については、全国的にも珍しい経木を使った麦わら帽子^(注17)を、地元で明治36年に創業した老舗帽子店桑田製帽所(山口市小郡下郷)に協力を得て、経木とデニムをかけあわせた麦わら帽子2点をプロデュースした。終演後のロビーにおいて、「商品化しないのか?」「米刺しよかったよ」等の反響があり、制作の目的が伝わったことが実感できた。

以上のように農作業着の歴史を見直すことと、現状を調査し現場の意見を参考に、ファッション性のある農作業の補助具をデザインした。既製の手ぬぐい等に

刺繍で手を加え、組み合わせることで機能とおしゃれの両方を備えることができた。

以上の手法は、誰もが家庭で作ることができるように意図しており、今後、ワークショップなどを通じて地域の人々と共創する機会を作りたいと考えている。

(4) LOVE 農 LOVE YOU LOVE ALL

(担当：甲斐少夜子)

農作業着を提案するために、実際にファッションショーの開催地である長門市油谷で自給自足の生活をする家族にフィールドワークを行った。その結果、機能性はもちろんだが、見た目にも可愛く着たくなるものであることが重要であることが分かった。一方で、2011年に日本上陸し、山口市内では2015年にオープンしたファブラボの機材(レーザーカッター・ミリングマシン・ペーパーカッター・3Dプリンターなど)を活用する機会を活かした生地作りを考えた。

デニム生地をレーザーカッターで削りだし水玉の模様を作った。レーザーカッターの強度や速度を調整することで、試行を繰り返し、最適なスピード強度を選定した。

作品のモデルには調査対象の農家の母子を起用することで、家族で楽しく農作業するライフスタイルのイメージを喚起できた。子供用には、着古した時の継ぎ接ぎの布の上に刺繍をあしらうことで、服に愛着を持ち、服を大切にする精神も養うことを意図したデザインにした(写真12)。

モンベッコは20代と30代の女性をターゲットにしているが、未来の農業を担っていく子供達にも普及させ



写真12. 「Love 農 Love You Love All」甲斐少夜子 デザイン・制作

ていきたいと考えている。その結果、自然と触れ合う喜びを幼少から育み、農業をすること、生きて行く力を備えられる環境を提供することができるのではないだろうか？そのためにも、子供用農作業着の商品開発が次なる課題であると考えます。

(5) 長門テキスタイルプリント

2015年度の実験的な取り組みとして、手描きした絵をテキスタイル化・データ化し最先端技術のテキスタイルプリンターで生地をプリントした。学部ゼミ生が、モチーフとして長門市特産野菜である白オクラ・たまげなす・ゆずきちからデザインして、デニムと組み合わせたオリジナルモンペッコを制作した。モデルには、長門市長をはじめ、長門市民に協力を得たことで、長門市との交流も図ることができたことは成果であった(写真13)。



写真13. 長門野菜柄テキスタイル 大西倉雄市長と市民モデル
 テキスタイルデザイン：国際文化学部文化創造学科企画デザイン研究室学部生デザイン
 荒木麻耶 左右各2番目
 加藤史織 左右各3番目
 白井香澄 中央
 手嶋優衣 両脇

今後、テキスタイルデザインのデジタル化がさらに進むと、1着用ごとに絵柄を変えることができ、かつコスト的にも採算ラインになるような時代が来るであろう。ファストファッションの時代だからこそ生活を個人でカスタマイズできる仕組みについて考えてみたい。

(6) 農耕の弥生人

弥生時代の上層部の人々が身につけていた袷袢衣の上着と、弥生後期の埴輪に表された男性の下衣を参考にし、柳井縞を主な素材としているので、農作業用というよりも、日常生活のリラックスする場面やちょっとしたお出かけ着を想定している。ゆったりとしたシルエットにし、袷袢衣のように帯はつけていない。淡い色調で帯をしていないので、引き締め効

果をねらい袖の一部や下衣に柳井縞の一部に使われている緑色の布をアクセントとしてあしらっている。デザインは水谷由美子(フィナーレのディレクター衣裳として着用)、柳井縞の織は石井忠男(柳井縞の会長)、モデリングは武永佳奈(山口県立大学非常勤講師)、そしてプロダクトは岡部泰民(匠山泊代表)がそれぞれ担当したものである(写真14、写真15)。

フィナーレの盛り上がりとして、サプライズゲストとして参加した安倍晋三内閣総理大臣と昭恵夫人のランウェイ(写真16)は観客を大いに楽しませた。



写真14. 「農耕の弥生人 × 柳井縞」 水谷由美子 デザイン



写真15. フィナーレ



写真16. フィナーレのランウェイ
 サプライズゲストの安倍晋三内閣総理大臣と昭恵夫人

4. 秋の収穫祭&シンポジウム2015

(1) 企画について

長門市油谷には、棚田百選に選ばれている東後畑の棚田がある。海に面しており、田植えシーズンには夕日が棚田に映える美しい景観が楽しめ、初夏には漁火を見ることがもできる。このような棚田は国内でも2、3例しかなく、希少価値の高い棚田である。しかし時代の流れには逆らえず、平成11年の日本棚田百選認定エリア7ha、210枚から、14年後の平成25年では、このうち3分の1が荒れた状態となっており、棚田の面積が減っている^(注18)。

そこで、企画デザイン研究室では、あらためて東後畑の棚田の美しさを内外にアピールするために、休耕田を復活するしくみを考え実践する方法を提案することとなり、やまぐち中山間地域元気創出応援事業として、事業名「油谷棚田景観創生とブランディング事業に係るコ・クリエーション」を3カ年計画で、宇津賀地区まちづくり協議会および特定非営利活動法人ゆや棚田景観保存会、東後畑営農組合、東後畑食育グループと共同で平成27年8月から開始することとなった。

1年目の今年、東後畑の景観資源を調査し、全国の棚田の中でアピールできる個性的性質を明らかにすることを目的に活動を行う。9月にはシンポジウムを開催し、棚田再生について事例研究や活用アイデアの提案などを行い、農業文化の歴史を調査する中から新しいヒントを探す試みである。

運営者は、宇津賀地区まちづくり協議会会長埴村浩と東後畑自治会長三村建治および長門市経済観光部農林課を含める地元関係者と山口県立大学企画デザイン研究室のゼミ生である。

平成27年9月23日（祝・水）、秋の収穫祭は午前から長門市油谷東後畑の棚田で、シンポジウムは午後から長門市油谷のラポールゆや大ホールにて実施した。シンポジウムのプロローグとして、当研究室は農業文化とコミュニティの関係に焦点を当て、宇津賀地区で継承されてきた芸能「後畑楽踊り」に着目し、秋の収穫祭の賑わいを演出するために、地元の和太鼓グループ「鼓波会」に演奏を依頼し、その後に油谷×山口県立大学企画デザイン研究室のプレゼンテーションを実施した。

(2) 秋の収穫祭の実施

平成27年9月23日（祝・水）快晴の下、長門市東後畑の棚田において午前11時より開会式が行われ、来賓の安倍昭恵内閣総理大臣安倍晋三夫人と大西倉雄長

門市長のあいさつからスタートした。参加者は、山口県立大津緑洋高校日置校舎生徒12名と教員2名、東後畑営農組合、宇津賀地区まちづくり協議会他数名、当研究室からは4名が参加した。作業服として、大西倉雄長門市長と企画デザイン研究室4名は、今年のモンベッコやまぐち編takijima2015を着用し、上着には7月のファッションショーのテーマTシャツを着用した。山口県立大津緑洋高校日置校舎生徒と教員にもこのTシャツを提供し、20名以上の参加者が同じデザインのTシャツを着用したことから、田園風景に視覚的な統一感と心理的には連帯感が生まれた（写真17、写真18）。



写真17. 長門市東後畑棚田 収穫祭 2015年9月23日



写真18. 長門市東後畑棚田 収穫祭 2015年9月23日

開会式の後には、鎌を使って稲刈りとハゼかけ体験をした。稲刈りは重労働であるが、大勢で会話をしながら作業をすることは楽しく、収穫の喜びを分かち合うことができた。稲刈りの後は、地元婦人会が作った自然栽培米のむすびを参加者で食べた。同じ作業、同じものを食べることで一体感を生んでおり、このような機会を創出することがこれからは重要だと考える。

(3) シンポジウムのプロローグ

シンポジウムは、13時30分から、長門市油谷ラポールゆや大ホールにおいて行われた。会場には、収穫祭にて刈りとられた自然栽培米の稲が届けられ、口



写真19. 秋の収穫祭&シンポジウム2015
山口県立大学 江里健輔理事長あいさつ



写真21. 油谷×山口県立大学企画デザイン研究室による
プレゼンテーション



写真20. 秋の収穫祭&シンポジウム2015 和太鼓演奏 鼓波会



写真22. 油谷×山口県立大学企画デザイン研究室による
プレゼンテーション

ビーや大ホールに収穫祭らしい彩を添えた。会場には、長門市内外から約170人余りの人が集まった。

ロビーにおいては、モンベッコの展示と販売およびDVD「アグリアート・フェスティバル2015トークショー×コンサート×農ガールコレクション 和敬清寂～夏は涼しく～」(2015年7月26日)を上映した。また、宇津賀地区にある貴布祢比須神社の秋祭りにて奉納されていた「後畑楽踊り」のパネル展示を行った。

最初に、山口県立大学理事長江里健輔によるあいさつ(写真19)、そして地元の和太鼓グループ「鼓波会」による和太鼓の演奏(写真20)でシンポジウムは幕を開けた。

油谷×山口県立大学企画デザイン研究室によるプレゼンテーションにおいては、前半は「ふるきよき時代の油谷」、後半は「アグリアート・フェスティバル2015農ガールコレクション&モンベッコ」と2つのテーマから農業文化に関する発表を行った。

ふるきよき時代の油谷については、先に記した貴布祢比須神社の「後畑楽踊り」について着目した。この踊りは、『新油谷町史』によると、毎年秋祭りにて氏子たちが神社へ奉納していたが、現在は、高齢・少子化、人口の減少に伴い継承者がおらず、祭りは行われているものの、奉納はされていない^(注19)。

私たちは、このような地域にある伝統芸能を新たに復活させ継承することが、人々の心を豊かにし、人と人の交流をもたらし、地域活性化に向けた重要なキーワードになるのではないかと提案した。

アグリアート・フェスティバル2015農ガールコレクション&モンベッコについては、企画デザイン研究室が取り組んできた農作業着「モンベッコ」の歩みについて、2013年、2014年、2015年の開発モデルを、ゼミ生全員がモデルとなり紹介した(写真21、22)。

モンベッコ開発の所以は、安倍昭恵内閣総理大臣安倍晋三夫人が、下関で米作りを始めた際、農作業着として若い女性がオシャレに着られる服がないことに気づき、企画デザイン研究室に農作業着の共同開発を提案したことにある。日本一美しい棚田創生と若者による農業の未来について考えるとき、若者や若い女性が農作業を行う時のファッションも、農作業を楽しく行うモチベーションになると考える。

(4) シンポジウム

シンポジウムは14時10分から約90分間行われた。パネラーに、安倍昭恵内閣総理大臣安倍晋三夫人、大西倉雄長門市長、三村建治東後畑自治会長、松浦奈津子



写真23. シンポジウム
(左から水谷由美子 安倍昭恵 大西倉雄 三村建治)

一般社団法人おんなたちの古民家代表の4人を招き、モデレータを山口県立大学国際文化学部長水谷由美子が務めた。テーマは「日本一美しい油谷の棚田創生と若者による農業の未来 Vol. II」。2015年7月26日に同会場で行われた「アグリアート・フェスティバル2015 トークショー×コンサート×農ガールコレクション 和敬清寂～夏は涼しく～」のトークショーから続く第2弾となった(写真23)。

パネリストの1人である松浦奈津子は、東京新宿高島屋に出店中のため事前に収録した映像での参加となった。またシンポジウム当日の朝、開店直前の東京新宿高島屋における「モチペッコ」(田楽米で作られたお菓子)販売の様子を記録した動画と聴衆へのメッセージが松浦奈津子から届き、シンポジウムの中で紹介した(写真24)。

シンポジウムにおいては、テーマに基づき、以下に記す3つの質問を用意した。①パネラーが現在取り組んでいる農業に関するテーマ、成果、そして課題について。②油谷のまち、及び油谷の農業、ここでは棚田百選に選ばれた油谷の棚田のブランディングをテーマに、何かアイデアはないか。松浦奈津子に関しては、山口市徳佐における活動経験をもとに何かアイデアは



写真24. シンポジウム (ビデオ出演の松浦奈津子)

ないか。③農業の6次産業化について、現在取り組んでいることや、油谷においてはどのような可能性があるか。これらの質問を中心に白熱したトークが展開された。

これらシンポジウムにおける詳細な記録は、最後に付録として添付しているので参考にされたい。シンポジウムにおいてアンケート調査を行い、75名の回答を得た。この内容分析については、別の機会に発表する予定である(写真25、写真26、写真27)。



写真25. ロビー展示



写真26. DVD上映



写真27. 「後畑祭踊り」パネル展示

(5) 成果

「秋の収穫祭&シンポジウム2015」においては、企画から実施にあたり、地域、行政、市民活動団体、そ

して大学の分野の異なる様々な関係者が関わりながら進められたことは有意義であった。収穫祭は本来コミュニティの共同の場であり、収穫の喜びの表現の機会である。稲刈りに参加した人々の農作業着をモンベッコや共通のTシャツで統一し、ファッショナブルな統一感を持たせることで、その場の雰囲気が変わり、新しいコミュニティが誕生した印象を与えた。

先人たちが培ってきた農業文化を継承しつつ、新しい地域創生の可能性を今後、継続的に模索して行く計画である。地域のコミュニティごとに形成された農業文化に併せて、地域固有の服飾文化を地域の人々と共創したいと考えている。

パネラーからオーガニックライフや自然栽培米を特徴とする地域創造の方向性が引き出された。75名から得たアンケートでは、このシンポジウムをきっかけに地域への関心が高まったことや地域創造の活動に参加したいという意見が多く見られた。今後、研究室が地域と進めていく活動の協働者が生まれたと言ってよい。

「日本一美しい油谷の棚田創生と若者による農業の未来」に向けて、油谷棚田景観創生とブランディング事業に係るコ・クリエーションのたいなる手応えが得られた。

まとめ

以上のように、当研究室は2013年から長門市油谷をフィールドとして、中山間地域活性化の事業に服飾デザインの分野から携わってきた。それ以前の20年近い地域との共同による地域資源を活かしたファッションショーを振り返りながら、地域と共創することの大切さと発展的な継続のむつかしさも明らかにした。

ファッションショーと連動した「秋の収穫祭とシンポジウム」は、農業文化の継承が地域コミュニティと農業活性化には大切であることを意図した企画であった。長門市経済観光部農林課との連携や地域の高校や自治会との共同で、稲刈りが行われ、農業の楽しさが共有された。

棚田百選に選ばれた宇津賀地区の東後畑では市の方針で自然栽培米が植えられている。また、宇津賀地区を含む向津具半島で自然栽培の農業に魅かれて若者が1ヶ月に12組も移住してきている現実を知った。

昭恵夫人の国際的な体験や、筆者が今年10月にニューヨークで触れた食品に関する情報などから、世界の先端ではオーガニックなライフスタイルへと人々の意識は向かっていることを確認した。油谷の自然と人に優しい自然栽培や徳佐の有機栽培などの取組みは、

世界の最先端の価値を具体化する活動でもある。サステイナブルな社会の実現というソーシャルイノベーションについても志向していく必要性を実感した。

2015年7月26日にラポールゆやで開催された「アグリアート・フェスティバル2015」において発表したモンベッコは5色展開であり、それぞれ東後畑の棚田の自然の情景を着想源として、「海」「空」「陽」「森」「玉」と名付けている。自然と同調するとともに、文学的な名称をつけられた衣服のイメージが、人々に自然回帰を喚起させるものであることを期待している。

また、本論で記したZero Wasteの概念は、今日における世界の最先端の生活文化での大きなテーマになっている。筆者は2009年にラップランド大学で実施したワークショップで、日本の着物に代表される構造や美意識を着想源にして、No Restという同様の概念で作品コンセプトを提案した。今年ラップランド大学を舞台として、北欧およびバルト3国から集められた学生たちに与えられた課題も同様であった。また、10月初旬に訪ねたプラット大学（ニューヨーク）と企業との共同アトリエの看板に掲げられていたのもZero Wasteであった。

すべてのビジネス活動にZero Wasteを実現することは難しいとしても、世界の大企業は企業の価値を高めるために、時代の先端の概念としてこのテーマを掲げて実験をしているのだ。

長門市の棚田での自然栽培米の実験は、特別なもの、あるいは小さなものということは簡単である。このような価値観で向津具半島に徐々に若者が移住しはじめている現象の意味を理解し、今後の地域創生のモデルとして広く発信していくことも大切だと認識している。

地方創生への一つの回答が長門の若者によって具体化されていると言ってもよいかもしれない。地方創生には従来からの住人だけでなく、地域外からの移住者の力を受け入れることが大切である。地域ごとに個性的な方法で地域の活性化が行われ個性的なライフスタイルが生まれて来る。

こうした価値観やライフスタイルの視覚化、また道具の一つとして我々の服飾が役立ってくれたなら、一つの地域創生の実現に服飾デザインが役立つことを明かしてくれるに違いないだろう。

謝辞

安倍昭恵夫人と共同研究をはじめて3年目ですが、本年はアグリアート・フェスティバル2015農ガールコ

レクションに、安倍晋三内閣総理大臣にもお越し頂き、農ガールコレクションでコメントを頂くとともに、ご参加を頂きました。地域創生に向けた服飾デザインの研究を励まして頂き、学生ともどもすべての参加者に勇気が与えられました。ご夫妻の地元への熱い思いに感謝申し上げます。

また、イベントの受け入れ母体である長門市大西倉雄市長、農業を通して日本の心を見直し新たな日本の文化創造を目指す今回の企画に主催者として支えて頂いたジャポニズム振興会大谷暢順会長、農業とその6次産業化を推進されている一般社団法人おんなたちの古民家松浦奈津子代表、やまぐち中山間地域元気創出応援事業を当研究室と共同で実施している宇津賀地区まちづくり協議会埴村 浩会長、棚田のブランディングを共同する東後畑自治会三村建治会長。本学江里健輔理事長、藤井哲男事務局長および本研究創作に多大な御支援助と御理解を頂いたすべての皆様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

なお、本編の編集についてお世話になった堀俊洋長門市総務部企画政策課長補佐、谷查恵子内閣総理大臣夫人付け、山口ファッション&テキスタイル研究所Y-FATI浅田陽子代表にお礼申し上げます。

注

- 1 水谷由美子 安倍昭恵 武永佳奈 水津初美 「モンベとサルッパカマをリデザインした農作業着の服飾デザイン『農業スタイルコレクション2013 in 長門油谷 with会津若松』を事例として」『山口県立大学学術情報』7号 山口県立大学、2014年、27-49頁。
- 2 「渋谷ギャルが農業再生 米作り挑戦、秋に商品化」産経新聞、2009年1月30日。
- 3 かわいい系「現代美術用語辞典ver.2.0 <http://artscape.jp/artword/index.php/> 2015年12月1日取得。
- 4 「アグリアート・フェスティバル2015『和敬清寂～夏は涼しく～』トークショー×コンサート×農ガールコレクション」2015年7月26日(日)ラポールゆや(山口県長門市)。
- 5 地方創生「新語時事用語辞典Weblio辞典」<http://www.weblio.jp/content> 2015年12月12日取得。
- 6 柳井縞(やないじま)は、素朴な木綿織物として古くから親しまれてきた伝統織物である。柳井が商都として栄えていた江戸時代、柳井縞は綿替(木綿商人が職人に原料を渡し、織る手間賃を払って製品を引き取る方法として発達した。柳井縞とは「柳井縞の会」<http://yanaijima.web.fc2.com/yanaijimatoha.html> 2015年12月1日取得。
- 7 玖珂縮は、寛永2(1749)年頃、玖珂町の富山秀意(享保10(1725)年～寛政元(1789)年)により考案され、縮織技法では日本でも初期のものである。玖珂縮「岩国 旅の架け橋」<http://kankou.iwakuni-city.net/kugatidimi.html> 2015年12月5日取得。
- 8 水谷由美子 岡部泰民 入江幸江 「ファッションと産学共同『ジャパンファッションデザインコンテストin山口』

- 実施の実例研究」『山口県立大学大学院論集』5号 山口県立大学、2004年、65-86頁。
- 9 水谷由美子 井生文隆 松尾量子 田中輝雄 岡部泰民 入江幸江 磯部素男 永富真子 神 大樹 「民公学連携によるファッション文化の発信と地域文化の創造『第21回国民文化祭・やまぐち2006ファッションフェスティバル』の実践的研究」『山口県立大学大学院論集』8号 山口県立大学、2007年、147-177頁。
 - 10 水谷由美子 浅田陽子 松原直子 武永佳奈 水津初美 「中山間地域活性化に向けた服飾デザインとアートマネジメント 2 徳地手漉き和紙を用いたファッションショーとサンタクロース村での作品展開催による実践的研究」『山口県立大学学術情報』6号 山口県立大学、2013年、11-35頁。
 - 11 Exhibition with 山口とくち和紙振興会 結の香「地域の宝もの -徳地手漉き和紙と生活の装い-」展 2014年12月10日-14日 山口県立美術館企画展示室2階。
 - 12 萩市とNPO萩まちじゅう博物館は、萩市のまちづくりの基軸となる萩まちじゅう博物館を推進するため、協働でワンコイン・トラスト(100円信託)運動を展開している。ワンコイン・トラスト「萩まちじゅう博物館」http://machihaku.city.hagi.lg.jp/onecoin/onecoin_shousai.htm 2015年12月5日取得。
 - 13 「奇兵隊隊服完成披露式」2013年6月7日 萩博物館。
 - 14 「癒し&Relax フェアー山口」2010年9月25日-26日 ココランド山口字部。
 - 15 ジャポニズム振興会とは、設立趣旨によると「日本人としての誇りを持ち続けるために、また、世界の中で日本が輝く存在であり続けるために、決して失ってはならないものが、「日本のこころと文化」だと、私たちは考えます。より多くの人に「日本のこころと文化」を見直す機会を提供し、それらを未来に向かって進化・発展させる「ジャポニズム振興会」の活動を通じて“誇り高き日本人づくり”をめざします。」とある。ジャポニズム振興会とは「ジャポニズム振興会」<http://japonisme.or.jp/about> 2015年12月1日取得。
 - 16 モンベについては水谷由美子 「2.モンベの変遷と現代」『モンベとサルッパカマをリデザインした農作業着の服飾デザイン『農業スタイルコレクション2013 in 長門油谷 with会津若松』を事例として」前掲書、2014年、31-32頁を参照。
 - 17 会員ビジネス情報・有限会社桑田製帽所「山口商工会議所」http://www.yamacci.or.jp/kaiho/kaiinsyoukai/2010/index2010_2.htm 2015年12月1日取得。
 - 18 石井里津子 「若者×地元 山口県長門市油谷の棚田と大学生」『情報誌「棚田 ライステラス」』第64号 全国棚田(千枚田)連絡協議会、2013年、8頁。
 - 19 大島自治会 「後島楽踊り」『新油谷町史』油谷町史編集委員会、2006年、136頁。参照。

【写真撮影者】

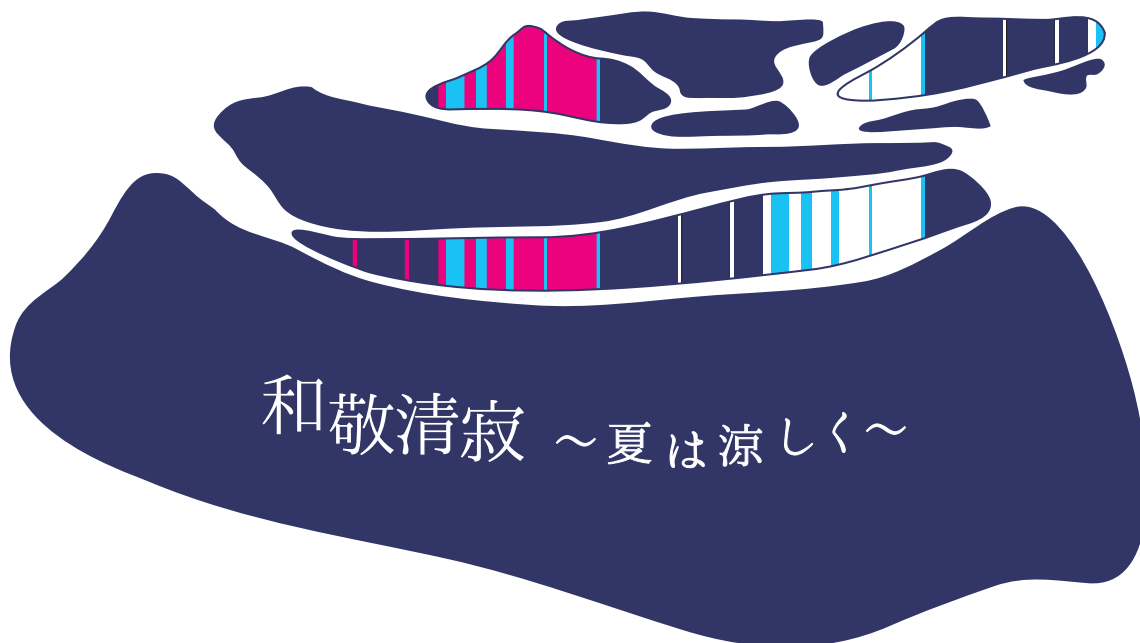
- 伊勢本 賢(1.2.3.8.9.10.11.12.13.14)
米元 花歩(山口県立大学企画グループ)(5.15.16)
加藤 史織(山口県立大学企画デザイン研究室)(7)
荒木 麻耶(山口県立大学企画デザイン研究室)(17.26)
長門市広報広聴課(18.19.20.21.22.23.24)
原田 章子(山口県立大学企画デザイン研究室)(25.27)

参考資料1

「アグリアート・フェスティバル2015トークショー×コンサート×農ガールコレクション
和敬清寂～夏は涼しく～」プログラム

アグリアート・フェスティバル2015

トークショー×コンサート×農ガールコレクション



2015年

7月26日(日) 14:00 開場
at ラポールゆや 14:30 開演

企画運営 | 安倍 昭恵×大谷 祥子×荒川 祐ニ×水谷 由美子
山口県立大学企画デザイン研究室

主 催 | アグリアート・フェスティバル2015実行委員会
ジャポニスム振興会 <http://japonisme.or.jp>
一般社団法人おんなたちの古民家

共 催 | 長門市

ごあいさつ

主催者

名誉理事長 安倍 昭恵〈内閣総理大臣 安倍晋三夫人〉



「農業はカッコいい」「将来は農業をやりたい」。こう考える若者たちが増えることを願って、山口県立大学の学生たちと一緒に始めたアグリアート・フェスティバルも、今年で3回目を迎えました。地方創生の動きのなかで、人々が地方の魅力を見直し、農業に夢と可能性を見いだす流れが確実に強まっていると感じます。人の営みの中でより自然に近いのが第一次産業であり、それを支える農村では、温かく優しい文化が育まれています。都会に住む人々も、農村を訪れることで自然と人間の関わりを取り戻し、癒しを得ることができます。豊かな自然と文化と農業があるここ油谷の地で、多くの皆様と一緒に、この祭典を楽しみたいと思います。

理事長 江里 健輔 〈公立大学法人山口県立大学 理事長〉



「和敬清寂～夏は涼しく～」をテーマにアグリアート・フェスティバル2015が長門市の協力を得て開催されることになりました。今年で3回目の開催で、長門市油谷の風物詩の一つになってきました。今回は、農・林・漁業を中心に、ゆっくりと流れる歴史を深く刻みながら存在し続けてきた油谷の地で、安倍昭恵内閣総理大臣夫人との共同開発である獨創性に富んだ、幻想的なモンベッココレクション、トークショー、コンサートなど、数々のイベントは、皆様を名状しがたい、心躍る幻想的空間に導き、身を潜めていた初夏が急に姿を見せたような華やかな空気を感ぜさせ、人間と自然との絆の深さを新たにする絶好の機会になることを期待しています。

理事 大谷 暢順 〈ジャポニスム振興会会長〉



「米作り」は「国創り」。農業は日本の基を成す文化です。ジャポニスム振興会では、安倍昭恵内閣総理大臣夫人の地方農業再生への取り組みを応援しております。

日本米の質、栽培技術は世界一です。また、日本人が培ってきた炊飯技術は、米の味を最大限に引き出します。そして、「和敬清寂」の題のとおり、日本の食事には、おもてなしの心があります。この精神と技術を海外に伝えることが、米作りが育んだ日本文化の昂揚につながるのです。ぜひ、「アグリアート」の動きを世界へと拡げていただきたいです。

ジャポニスム振興会は今後も日本の農業を支援するとともに、食にも神仏を見出す日本人の精神、文化を国内外で発信していきます。

理事 松浦 奈津子 〈一般社団法人おんなたちの古民家代表〉



私たちは、歴史的・文化的価値のある日本の古民家を、“地域の宝物”として、一つでも多く未来に残していこうと活動しています。築200年以上の古民家を「田楽庵」として再生したのを機に、大学や地元農家と協力し、昨年からはモンベッコを着てオシャレに田植えを実施。「田楽米」や米粉を使ったスイーツ「モチベッコ」のブランディングにも力を入れており、これが地域の活性化につながればと願っております。

共催者

理事 大西 倉雄 <長門市長>



このたび「アグリアート・フェスティバル2015」が安倍昭恵内閣総理大臣夫人をはじめ、多くの方々のご尽力により、ここ長門市油谷で盛大に開催されますことを、心からお慶び申し上げます。

現在、日本の農業を取り巻く環境は極めて厳しく、とりわけ担い手不足は喫緊の課題となっています。今回の取組みにより、若い世代の方々に農業へ興味の手を向けていただくと同時に、本市の進める自然栽培米などの試みをうまく化学反応させていくことが、農業の次の扉を開いていくものと、期待しているところです。

本フェスティバルのご成功と、本日お集まりの皆様方のご健勝を祈念申し上げ、お祝いのこととします。

企画者

荒川 祐二 <作家・小説家>



昨年よりこのアグリアート・フェスティバルに関わらせて頂いていますが、日本文化の継承、また世界に向けての進化と伝達といった意味でも、本当に意義のある活動だと思います。

また『お洒落に農業を』、そのコンセプトが広まってくると、結果的に農業に携わる若者が増え、今日本が抱えている食料不足の問題や地方の後継者不足といった問題にも解決のきっかけを作れると思います。

まだ先は長いかもしれませんが、それでも見据える未来はどこまでも大きく、それでいて楽しく明るくこのイベントに皆様も関わって頂けたらと思います。

これからも末長く続いていく事を心からお祈りしています。

実行委員長 水谷 由美子 <山口県立大学国際文化学部長 教授>



長門市油谷を拠点とする農業×芸術文化×ファッションの祭典であるアグリアート・フェスティバルは今年で3年目となります。安倍昭恵内閣総理大臣夫人と2006年の宮中晩餐会用ドレスの開発以来、山口から服飾文化の創造と発信をする活動をご一緒させて頂き、学生ともども心より喜ぶとともに感謝しております。

今年は、モンベッコレーベルによる新作のモンベッコとサロベッコの商品開発がラインナップします。昨年より小規模ではありますが、コレクションが徐々に人々の生活の中に入り始めました。特に友情出演の「カワイイ大使」木村優さんと青木美沙子さんアレンジのモンベッコスタイルも楽しみにして頂ければと思います。

京都のジャポニスム振興会の支援を受けて、地域の文化資源を活かしたコンサートや長門市とともに棚田百選の東後畑における日本海に面した美しい棚田の再生について、若者による農業の未来を視野に入れたトークショーも開催します。皆様、どうぞゆっくりとお楽しみ頂ければ幸いです。

最後になりましたが、御協力を頂きましたすべての関係機関や参加者の皆様に、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

プログラム

今回のフェスティバルでは、茶道の原理「和敬清寂 ～夏は涼しく～」をテーマに、日本人が育んできた人を思いやり、もてなす心に学び、農業とともにある自然を敬い共存する心に注目します。自然と人間との関わりの真髄を謳う金子みすゞのふるさとで地方創生の詩と一緒に奏でましょう。

おいさつ

安倍 昭恵（内閣総理大臣 安倍晋三夫人）

江里 健輔（山口県立大学 理事長）

和歌清寂

すべてをうけいれ、どうにかいこと

トークショー

「日本一美しい油谷の棚田創生と若者による農業の未来」

安倍 昭恵

大西 倉雄（長門市長）

松浦 奈津子（一般社団法人おんなたちの古民家代表）

モデレーター：水谷 由美子（山口県立大学国際文化学部長 教授）

コンサート

大谷 祥子（箏曲奏者） × 安倍 昭恵（金子みすゞの詩朗読）

【演目】・鳥のように 沢井忠夫作曲
・小雀 金子みすゞ作詞 大谷祥子作曲
・星とたんぼぼ 金子みすゞ作詞 大谷祥子作曲
ほか

和歌清寂

心の中まできよらかであること

和敬清寂のテーマ 徳地手漉き和紙×カリグラフィー×ファッション

モデル： Alexandre Begin 吉田 智絵 堀之内 健 伊藤 依里 Kalila Mark

和紙製作：千々松 哲也

デザイン(上衣)：甲斐 少夜子

書：堀之内 健(かえるの学校)

(下衣)：モンベッコ「やまぐち縞takijima2015」
プロジェクトチーム

和紙加工,協力：河村早紀 下川まつゑ 野坂光里 宮坂莉穂

素材：徳地手漉き和紙(十文字漉き)



うやまいまうこと

農ガールコレクション (山口県立大学企画デザイン研究室 presents)

MARINE GARDEN [花栽培のために]

若い人に花栽培の仕事を楽しくしてほしいという思いから、シンプルな作業着ではなく機能性のあるカワイイつなぎを考案しました。マリンは長門市の海のイメージからきています。
..... デニム

デザイナー

渡辺 詩織
(国際文化学部
国際文化学科3年)

モデル

山田 瑞貴
丸尾 瞳

3世代健康スタイル [野菜栽培のために]

健康的なライフスタイルを楽しみたい人のために考えました。体に良い藍染を取り入れ、スポーツシーンにも畑仕事にも対応できるよう小物を充実させました。
..... 藍染×デニム

小田 玲子

(大学院
国際文化学研究所2年)

三好 克江
松下 聡子
松下 未来

Fruits farmer meets TANADA [果樹栽培のために]

油谷の象徴である棚田をイメージしたテキスタイルを作品の中に取り入れ、果実栽培を営む人のためにポケットの位置や大きさなどを工夫しました。
..... オリジナルテキスタイル×デニム

手嶋 優衣

(国際文化学部
文化創造学科3年)

小川 大貴
齊木 奈央

Love 農 Love You Love All [果樹栽培のために]

農業を愛することは人を愛すること、宇宙に存在するものすべてを愛することに通じる。水・植物・食物への敬いを可愛いドット柄で表現しました。
..... PCパーツ×漁網×デニム

甲斐 少夜子

(大学院
国際文化学研究所2年)

井上 愛満
井上 燦
井上 かみ

「米刺し」のある農作業着 [花栽培のために]

東北地方では、農作業着の補強と保温性を高めるため、生活の中にいつも刺し子がありました。そして、その一刺しに祈りを込めました。米刺しは、米の豊作を祈ります。
..... リサイクルデニム×豆絞りてぬぐい×経木の帽子

原田 章子

(大学院
国際文化学研究所1年)

三原 彩子
増野 聖子

TAMAGE farmer's [野菜栽培のために]

長門市特産品、「たまげなす」からインスパイアされてこの作品を作りました。現代の流行と、古くから伝わるもんべを掛け合わせたパンツになっています。
..... 柳井縞×デニム

白井 香澄

(国際文化学部
文化創造学科3年)

佐田 香織
藤永 咲月

tsunagu-kikai [稲作栽培のために]

白いデニムを使用し、使っていくうちに汚れ、その汚れを経年変化として、誇りとして身につけてほしいと思い、作りました。機能性を重視しファスナーを腰から足にかけてつけています。
..... 柳井縞×デニム

荒木 麻耶

(国際文化学部
文化創造学科4年)

古川 絵里
濱田 光衣
山根 沙千

suomi kahvila [6次産業におけるサービス業のために]

北欧デザインをモチーフにしたカフェのユニフォームです。自然への愛から生まれるフィンランドのロングライフデザインを山口の地域資源で提案します。
..... フェルト×玖珂縮×デニム

中村 正代

(国際文化学部
文化創造学科4年)

伊藤 瑛美
中原 維子
高橋 知里





心を開いてながよくすること

長門テキスタイルプリント (山口県立大学国際文化学部 企画デザイン研究室 presents)

本年度の実験的な取り組みとして、手描きした絵をテキスタイル化・データ化し生地にプリントしました。長門市特産の野菜や花などをモチーフにデザインし、テキスタイルプリントとデニムで制作したオリジナルモンペッコをはいて登場するのは長門市長をはじめとする長門市の方々です。

テキスタイルデザイン : 荒木 麻耶 加藤 史織 手嶋 優衣 白井 香澄

モデル : 山田 祐子 西岡 緑 松永 和子 長 奈美 宮島 香織 宮津 美里 大西 倉雄(長門市長)

mopekkoレーベル「やまぐち縞takijima2015」モンペッコ・サロベッコ コレクション2015

モデル : 河本 知加 下田 尚実 田島 ゆうこ 渡部 美来 杉山 敏美

ゲストモデル : 木村 優 コーディネート 木村 優
青木 美沙子 コーディネート 青木 美沙子
安倍 昭恵 スタyling・小物デザイン 水谷由美子 中村正代

モンペッコ・サロベッコ

デザインディレクション: 水谷 由美子 服飾デザイン・モデリング: 企画デザイン研究室ゼミ生
やまぐち縞takijima2015: 甲斐 少夜子 小田 玲子 甲斐 少夜子
プロダクト(モンペッコ): 合資会社ローリング(大刀洗町) 中村 正代 荒木 麻耶
(サロベッコ): 匠山泊(山口市) 白井 香澄



農耕の弥生人×柳井縞

デザイン・モデル: 水谷 由美子 柳井縞: 石田 忠男(柳井縞の会会長)
モデリング: 武永 佳奈 プロダクト&プロデュース: 岡部 泰民(匠山泊代表)

スタッフ

総合ディレクター・服飾デザインディレクション 水谷 由美子
作曲・音楽監督 田村 洋(作曲家 山口県立大学名誉教授)
舞台・照明・舞台美術 山内 浩之(株式会社やの舞台美術)
スタイリング REI・KO(リル・レイ・ダンススタジオ)
ヘアメイク Family Takako: 石井 貴子(代表取締役) 井手 弓(アシスタント)
サロン・ト・エミール: 西脇 末美 長原 麻由美 三牧 弘子
TYSメイクアシスタント: 佐伯 祐佳
YICビューティーモード専門学校: 千村 希人(美容学科教員)
石川 綾乃 大橋 みゆき 河本 真季 塔野 渚海 原田 結衣
映像撮影 山口メディア研究所
写真撮影 伊勢本 賢
MC 東房 由佳
グラフィックデザイン 加藤 史織
運営スタッフ 小田 玲子 甲斐 少夜子 原田 章子 齊藤 輝 中村 正代
荒木 麻耶 加藤 史織 白井 香澄 手嶋 優衣 渡辺 詩織
藤井 哲男 吉田 昇司 渡邊 隆之 伊藤 泰子 中原 克己 米元 花歩
馬場 裕之 片山 真由子 櫻木 祥 手塚 茜音 田中 佑季
橋本 祐里 河村 早紀 下川 まつゑ 野坂 光里 原北 早紀
宮坂 莉穂 木下 菜優 川口 千穂



プロフィール

農ガールコレクション モンペッコ共同開発



〈名誉理事長 内閣総理大臣 安倍晋三夫人〉

安倍 昭恵

聖心女子学院幼稚園から高等学校卒業。聖心女子専門学校英語科卒業。
立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科修了。株式会社電通、新聞局を
経て1987年安倍晋三氏と結婚。ランニング、ゴルフ、お米づくり、薙刀が趣味。



〈実行委員会委員長 山口県立大学国際文化学部長 教授〉

水谷 由美子

山口の地域資源を活かし、服飾デザインを通して、地域のブランディングや
商品開発について産学公連携による研究創作やラップランド大学との共同研
究を行っている。また、サービスデザインの手法を取り入れた、サステイナ
ブルなデザインアプローチを実施。

企画デザイン研究室：小田 玲子 甲斐 少夜子 原田 章子 齊藤 輝 中村 正代
荒木 麻耶 加藤 史織 白井 香澄 手嶋 優衣

企画



荒川 祐二

1986年3月25日生まれ。上智大学経済学部経営学科卒業。
大学時代に「自分を変えたい！」という思いで、日本一汚い場所新宿駅東口の
掃除をたった1人で始め、半年後には総勢444人を集める。現在は小説家業を行
う一方で、通算300回以上、参加者累計10万人以上に及ぶ全国の学校・教育機関
を中心とした講演活動、イベント、メディア出演等、様々な活動を行っている。

出演者 (コンサート・農ガールコレクション)



大谷 祥子

ジャポニズム振興会副会長。東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。
平成25年度第68回文化庁芸術祭新人賞受賞。古典邦楽のみならず、様々なジャ
ンルのアーティストと競演、全国でコンサート活動を展開。僧侶としての活動
の場も広げている。



木村 優

世界で1番ピンクなクリエイター！
2009年外務省より原宿ファッション日本代表の「カワイイ大使」に選ばれ、
日本だけでなく世界各国のクールジャパンイベントでクリエイター、タレント
として活躍。近年は声優としても活躍している。



青木 美沙子

日本ロリータ協会会長、ロリータモデル、看護師。
2009年外務省よりロリータファッション日本代表の「カワイイ大使」に選ばれ、
日本発祥のロリータファッションを通して日本を好きになってもらう活動をし、
現在までに20か国30都市以上を歴訪する。

ロビー展示

ジャポニスム振興会

米創りは国創り 日本のこころと文化を伝えるジャポニスム振興会 無料会員登録受付中!!
年4回会報誌をお手元にお届けします。

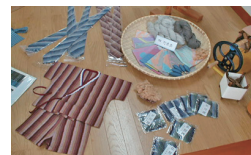
会報誌(Japonisme)の設置 ※販売なし



玖珂縮の会（岩国西商工会議所）

綿の糸を使って縮を織っています。織ることも大変ですが、縮むことによって布の変化を楽しむことができるので、良い作品を作ろうと皆で頑張っています。

販売商品：ネクタイ、コースター、しおりなど



柳井織の会

現在の『手織り柳井織』は幻となっていた織物を有志により22年前に再復興したものです。素朴な手織りの風合いをお楽しみ下さい。

販売商品：ポーチ、名刺入れ、コースターなど



一般社団法人おんなたちの古民家

丹精こめて育てた、阿東の美味しいお米「田楽米」。名誉会長 安倍昭恵さんとともにモンペッコを着て植えたお米で作ったスイーツ「モチペッコ」と、「和酒彩葉田楽庵」。やまぐち6次産業化・農商工連携推進事業にも認定された商品です。

販売商品：モチペッコ、和酒彩葉田楽庵



木作家 竹部 徳真

樹齢100~200年の希少なアカマツを使用し、極限まで薄く挽いたそのオブジェの中に光源を置き、光を透過させて幻想的な空間を作り出す。

販売商品：零れ日 (KOBOREBI) ※置き型の照明です。



長門市

自然栽培米「ながとのこめ」…農業も肥料も与えず、東後畑の棚田で栽培したお米です。棚田米…面積の小さい棚田で、手間隙かけて、農家の方がつくったお米です。はぜかけでの天日干しが自慢です。

販売商品：自然栽培米「ながとのこめ」、棚田米など



有限会社ナルナセバ

山口県立大学発ベンチャー企業。
mompekkko2015モデルの販売は16:30よりスタートします。

販売商品：モンペッコ、サロペッコ、和敬清寂Tシャツなど



ロビー展示企画：齊藤 輝



mompekkko

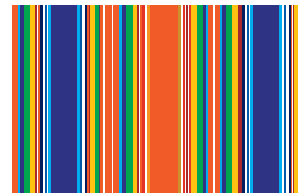
安倍 昭恵 × 山口県立大学企画デザイン研究室 × (有)ナルナセバ プロジェクト

当プロジェクトは、安倍昭恵内閣総理大臣夫人が下関で米作りを始められた際、農作業時に若い女性がオシャレに着られる服がない事に気づかれ、山口県立大学企画デザイン研究室水谷由美子教授に農作業着の共同開発を発案された事に始まる。

- 2013年 5月 現代に合ったスタイリッシュなもんぺを「モンベッコ」と命名し、日本農業新聞にパターンを掲載
- 同年10月 グローバルモンベッコ発表
- 2014年10月 「モンベッコやまぐち縞raita2014」として商品化 mompekkkoレーベルより発表販売開始
- 2015年 7月26日 2015モデルとして「モンベッコやまぐち縞takijima2015」「サロベッコやまぐち縞takijima2015」を発表販売

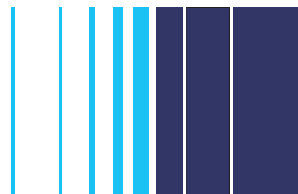
「やまぐち縞raita2014」

2009年より、山口県立大学企画デザイン研究室はフィンランド国立ラップランド大学と合同研究を行っている。そのフィンランドの民族衣装に見られる伝統縞と山口県の伝統織物である柳井縞・玖珂縞を掛け合わせた縞である。「raita」はフィンランド語で縞を意味する。



「やまぐち縞takijima2015」

日本の伝統縞文様の中に、「滝縞」がある。暑い夏に目で‘涼’をとる日本人の知恵である。また、自然界に存在するものには無秩序に見えて実は秩序ある規則が見られる。植物の花びらの数や枝別れして出る葉の数のように一定の規則「フィボナッチ数列」を配している。日本の伝統文様の中に自然界の数美学を掛け合わせ、涼しさと美しさを融合した縞である。



有限会社 ナルナセバ

2014年10月 山口県立大学企画デザイン研究室とのコラボレーションにより新レーベルmompekkko発表。1次産業から6次産業までの農業を視野に、企画デザイン研究室のサテライト研究室として作業着の開発販売を行う。舞台衣装、ダンス衣装および各種アパレルや小物のデザイン販売も行う。

〒753-0093 山口市大殿大路246-1 Tel:083-934-5566



mompekkko 取扱店

百姓庵
〒759-4623 長門市向津具下1098-1
TEL&FAX 0837-34-0377
<http://hyakusho-an.com/>

KULABO大正館
〒759-4101 長門市東深川1904-1
TEL0837-22-2930
<http://www.taishokan.jp/>

Jasmine.
〒753-0083
山口市後河原177高杉アパート
<https://www.facebook.com/jasmine.bookcafe>



アグリアート・フェスティバル2015理事会・実行委員会

理事会

名誉理事長 安倍 昭恵（内閣総理大臣安倍晋三夫人）
理事長 江里 健輔（公立大学法人 山口県立大学理事長）
理事 大谷 暢順（ジャポニスム振興会 会長）
松浦 奈津子（一般社団法人おんなたちの古民家代表）
大西 倉雄（長門市長）
村岡 富士夫（NPO法人ゆや棚田景観保存会理事長）
三村 建治（東後畑自治会長）

実行委員会

実行委員長 水谷 由美子（山口県立大学国際文化学部長 教授）
実行委員 大谷 祥子（ジャポニスム振興会副会長）
鮎川 建司（安倍昭恵グループ）
谷 查恵子（安倍昭恵グループ）
和田 一正（NPO法人ゆや棚田景観保存会理事）
三村 フジエ（東後畑食育グループ代表）
堀 俊洋（長門市企画総務部企画制作課）
岡村 安彦（山口県萩県民局長門駐在）
杉山 敏美（NPO法人ふるさと山口経営者フォーラム会長）
甲斐 少夜子（有限会社ナルナセバ代表取締役）
藤井 哲男（会計担当 公立大学法人山口県立大学事務局長）

企画

安倍 昭恵
大谷 祥子
荒川 祐二
水谷 由美子
山口県立大学企画デザイン研究室ゼミ生

協力

（順不同） 山口県立大学（国際文化学部グローバル人材育成推進事業）
安倍昭恵グループ NPO法人ゆや棚田景観保存会
東後畑営農組合・東後畑食育グループ
匠山泊 合資会社ロオーリング
柳井縞の会 玖珂縮の会 NPO法人にっぽんing協会
有限会社ナルナセバ
山口ファッション&テキスタイル研究所Y-FATI
田中 奈津子 YICビューティーモード専門学校
サロン・ド・エミール
Family Takako

服飾制作協力

（順不同） 鈴村秀子 藍と愛の会
武永 佳奈 原田 真衣
防府とくち農業協同組合 西部営農センター
大道スウィートローズ 有限会社桑田製帽所
アボンコーポレーション株式会社
有限会社コイワ 株式会社キャッスル
FabLab Yamaguchi β

○ お問い合わせ

アグリアート・フェスティバル2015 実行委員会事務局
〒753-8502 山口県山口市桜島3-2-1 山口県立大学内
Tel: 083-928-3423 担当：水谷
Email: agrf20150726@gmail.com

参考資料2 「秋の収穫祭&シンポジウム2015」 棚田シンポジウムの全記録

「秋の収穫祭&シンポジウム2015」 棚田シンポジウムの全記録

- ・テーマ：「日本一美しい油谷の棚田創生と若者による農業の未来Vol.Ⅱ」
- ・開催日時：2015年9月23日（祝/水）
- ・開場：13:00 開演13:30
- ・会場：ラポールゆや 大ホール
- ・パネラー：安倍昭恵（内閣総理大臣安倍晋三夫人）
大西倉雄（長門市長）
三村建治（東後畑自治会長）
松浦奈津子
（一般社団法人おんなたちの古民家代表）
- ・モデレータ：水谷由美子
（山口県立大学国際文化学部長）
- ・シンポジウム開催時間：14:10
- ・シンポジウム終了時間：15:40

○（司会） 始まりです。ここに、先ほどの稲が司会台を彩っておりますが、よろしくお願ひします。

まず、パネラーの方々を御紹介いたします。安倍晋三内閣総理大臣夫人、安倍昭恵様、壇上へお上がりください。（拍手）

長門市長、大西倉雄様。（拍手）

続きまして、東後畑自治会長、三村建治様。（拍手）

そして、司会を務めますのは、山口県立大学国際文化学部長、水谷由美子です。（拍手）

なお、本日会場にはいらっしやいせんが、一般社団法人おんなたちの古民家代表、松浦奈津子様にも、後ほどビデオレターで参加していただく予定です。

それでは、司会の水谷由美子へマイクを渡します。

○司会（水谷由美子） 皆さん、こんにちは。7月26日に、ここで大変サプライズなファッションショーをさせて頂きました。皆さんの中には見に来ていただいた方もいらっしやるのではないかと思います。その節は、どうもありがとうございました。（拍手）

もう、大変な反響です。昨日、私は韓国から帰ったばかりなのですが、向こうでこのファッションショーのプレゼンをいたしました。昭恵夫人を初め、

総理までもこのランウェイを歩いてくださったということで、慶南大学校の関係者の皆様が大変驚かれました。

アグリアート・フェスティバル2015では、今回のシンポジウムの走りとして簡単なトークショーをさせて頂きました。今日はその続きとしてじっくりと討論したいと思います。テーマはこの油谷の棚田を世界一といいますか、まずは日本一すばらしい棚田にしていこうということです。そして、長門市の農業は全国的にも非常にユニークな農業を実際にやられているので、さらにこの活動の個性を磨いていこうということです。今日は皆さんと一緒にパネラーの方も、いろいろな角度から議論をしていただこうと思っております。

アグリアート・フェスティバル2015の時は、おんなたちの古民家代表の松浦さんがパネラーで同席されていたのですが、今ちょうど東京の新宿高島屋におられます。本日パネラーが穿いているモンベッコを穿いて、昭恵夫人をはじめ多くの参加者が植えたお米で商品開発された「モチベッコ」というお菓子がございます。そのモチベッコを何と今、新宿高島屋の地下で販売しておられます。その様子は後ほど舞台のスクリーンに映るようになっております。今朝撮影したものを送ってもらっております。こういう理由で、松浦さんは今日は参加できませんが、事前にインタビューしたものを撮影した映像がありますので、映像で参加して頂くことにしております。どうぞ、よろしくお願ひいたします。

それでは、早速始めさせていただこうと思っております。

それでは、まず安倍昭恵夫人に御発言を頂こうと思っております。現在、実際に昭恵夫人が取り組んでおられる農業活動に関するご自身のテーマや、そこで今得られている成果や今後の課題などについて、お考えをお聞かせください。

○パネラー（安倍昭恵） 皆さん、こんにちは。今日は連休の最終日ということで、それぞれ御予定もあったかもしれませんが、このシンポジウムにお越し頂きましてありがとうございます。

また、7月26日のファッションショーのときにも、本当にたくさんの皆様方に御参加をいただきました。今年で3回目を迎えたんですけども、大好評で、また来年もやりたいと思っているところです。ぜひ、また来年も皆さんにお越しいただければと思っています。

今日はお越しいただいている方の中にも、実際に農業に関わっておられる方がたくさんいらっしゃるかもしれませんし、市長も農業の専門家で、三村さんもそうです。その中で、実際にはほとんど農作業に関わっていない私が農業を語ることは、本当はできないのかもしれませんが、素人として何をしているかということ、少しお話をさせていただきます。

2011年から下関で無農薬の米をつくり始めました。それまで、後援会に農家の方がたくさんいらっしゃるの、御挨拶回りではよく農家に伺わせていただいております。田んぼに入ることはほとんどなかったんですけど、畑の中でお野菜を引かせて頂いたり、収穫のお手伝いをさせて頂いたりしていました。でもまさか、自分でやろうなんてことは全く考えていなかったんですが、ある時急に、これからの時代は、自給自足ができたらいいだろうなと思っただけです。

私は頭で考えることはすごく苦手なんですけども、急に直感的に物事を感じるがあります。女性のほうがそういう能力は高いと思うんですけど、2010年ぐらいから何だか急に、自給自足の時代がくると思っただけです。そうしたら、2011年に東日本大震災が起きました。震災が起こったときに私は東京にいたんですが、スーパーからもコンビニからも物がなくなっていく状況を見て、やっぱり自給自足ができたらいいだろうなと思っただけです。

食べ物を確保するということがいかに大切か。食べ物がなければ生きていけないので、何かしらの食べ物を自分でつくることができれば、それで交換して食べる物を確保することができると思っただけです。それで今日もここにいらしているんですけども、下関の植村さんという農家さんをお願いして、無農薬の米をつくり始めました。

自分で田んぼに入って、はだしで田植えをします。そして今日も午前中、油谷の棚田で稲刈りをしてきましたけれども、実際、鎌を使って刈っています。その米を食べてみると、本当においしくて、これを皆さんにぜひ食べていただきたいと思っただけです。それで、2010年から東京の神田に UZU という小さなお店の経営を始めまして、そこで私がつくったお米を食べていただいています。お米以外にも、なるべく無農薬、無添加で、化学調味料を使わない国産の食材にこだわって、安心して食べていただけるお料理を提供させていただいています。

去年から、山田錦という酒米をつくり始めました。無農薬で酒米、山田錦は難しいから、できるかどうか分からないというふうには言われたんですけども、できなくてもいいからぜひつくってくださいとお願いをして、つくっていただきました。おかげさまで立派な山田錦が収穫できまして、そして今年も、それを会津若松に持って行って、私も少しだけ仕込みのお手伝いをしたんですけども、お酒にして、9月8日にお披露目をしてまいりました。

その会津若松の末廣酒造の新城社長は、私に対しては快く、いいよと言ってくださったんですけど、内心は長州の米を使って会津で酒をつくるのはと、葛藤もあったのではないかと思います。でも本当においしいお酒ができました。私はそれに、「やまのこころ」という名前をつけました。

安保法案もようやく国会を通過して主人もほっとしているところだと思いますが、海外との関係以上に、私は、まずは日本の中が平和にならなくてはいいと考えています。もう、長州だ、会津だと言っている時代ではないのではないかと。まず日本の中で、みんなが一致団結していかなくては、世界平和はないのではないかと考えています。それで、最初にこのファッションショーを開催したときにも、会津若松の市長に油谷町に来ていただいて、ランウェイと一緒に歩かせていただきました。お酒であつたり、お米づくりであつたり、そういうものが本当に日本人として大切な文化なんだということ、みんなが感じてもらえたらいいなというふうには思っているところです。ちょっと長くなりましたけれど。

○司会（水谷由美子） ありがとうございます。（拍手）本当に具体的に田植えをされて、そこから6次産業まで、短い期間にどんどん具体化されていることはすばらしいなと思っております。

それでは次に、大西倉雄市長、よろしくお願いたします。

○長門市市長（大西倉雄） 皆さん、こんにちは。今日は、今、昭恵さんからお話がありましたように、棚田で稲刈りをしてきまして、汗びっしょりになってまいったところですけども、昼には今年とれた自然栽培米を、大変おいしくいただいてきたところでございます。やはり一味違うなというのを改めて感じたところです。

私は、農業に対して個人的にもいろいろ思い入れはありますが、市長としての立場で、長門の

農業、あるいは日本の農業をどうしていくのかというところから、ちょっと話をさせていただきたいと思えますけれども、今、農業に関して長門で見ますと、農業従事者のいわゆる平均年齢は、70歳なんです。漁業も同じぐらいです。10年後にどうなるかということですよ。

確かに今、高齢化社会の中で、農業、漁業も80歳になっても頑張ってる方が、たくさんいらっしゃいます。こういった中であって、長門の圃場整備をされた農地もさることながら、長門には中山間地域が多いものですから、棚田もたくさんございます。これが、今から10年後にどうなっていくのかということをおぼろげに思わざるを得ませんでした。

そういう中であって、じゃあ、どうしていくのかというときに、やはり農家、漁家の所得向上を図っていくことが必要じゃないかと。やっぱり、農業でも漁業でも、お父さん、お母さんが、「農業だけはやるなよ」、「漁業だけは就くなよ」、「勉強しての、東京へ行って頑張れよ」というようなことばかりじゃあ、やっぱりこの地域は荒れていくのは目に見えているわけですから、農業、漁業で生活ができる。少なくとも、いわゆる農業、漁業の取り組みというのは、自然との戦いですから、心豊かになることは事実ですけども、心豊かだけではなくて、やっぱり生活もできるような仕組みをつくっていかなくちゃいけないということで、今、長門成長戦略行動計画というのを立ち上げているところでございます。

その中であって、農業でいうと一市一農場構想ということをおぼろげにしております。これはなぜかという、長門にある農地は全てみんなのものだと。確かに個人個人の持ち物ではございますけれども、個人個人が守っていくという発想の転換をして、みんなが守っていく、そういったことに置きかえていく必要があるのではないかとということで、一市一農場構想ということをおぼろげに立ち上げているところでございます。その一つの例がまずこの長門は、イノシシと鹿と猿と、猪鹿蝶ではございませんが、全部あるわけですから、少なくともやっぱり鹿は、もうこれ以上こっちに来てもらうと困るということで、農免道からずっと、生島から三隅まで、約70キロの間、防止柵を今やっている。今年度は、三隅から旧長門境まで防護柵は完成するところでございますけれども、そういうふうな、自分たちの農地じゃなく、だからみんなが守っていくという発想が必要だということ

と。

そして、やはりそういった中であって、農業もいわゆる、確かに個人個人が頑張っている農家の方は、まだまだ頑張りたいと思えますけれども、しかしながら、農業者がこれだけ少なくなっていく中で、農業法人なり担い手に農地の集積をして、規模拡大をした人は規模拡大をしっかりしていく仕組みをつくってもらわなくちゃいけません。いわゆる同じ米をつくっても、水の体系、水系でやりますと、水系ごとに農地を集めることによって、品種ごとに並べて作ることが、可能になるわけですから、そういうふうなことをしっかりやっていこうじゃないかということです。

そして、いわゆる団地ごとに作る作物をしっかり割り振ることによって、農家そのものの所得向上にもつなげていく。そして中山間地域において、少し傾斜のある棚田部分においては、イチゴやスイカなどの園芸作物をしっかり振興していこうじゃないかということです。

そして、もっと傾斜のある棚田のところについては、後ほど三村さんから話があると思えますけれども、自然栽培米等の付加価値の高いものをやっつけていこうと考えています。

長門市は水田放牧の発祥の地なんです。ですから、更に厳しいところについては、水田放牧を加味しながら畜産も振興していきます。長州長門和牛は今、大変に高値で取引をされておりますけれども、頭数からすると極めて少なくなっているところがございます。それを、水田放牧を活用しながら、いわゆる畜産に生かしていく。そういったことを一連の流れとして、一市一農場構想、いわゆる自分たちの農地だけでも、市全体で考えていこうと提案しています。

そして、一番大きなコンセプトは、長門市でできた農産物は、どこの農場で採っても、安心・安全なものを消費者に提供をするということです。この点をしっかり確立しなければ、この一市一農場構想は夢に描いた絵あるいは物語になるという思いでございます。

後ほど、また詳しい話をさせていただきたいと思えますけれども、そういう一市一農場構想という思いを描きながら、農業振興を図っていきたいと思っているところです。

○司会（水谷由美子） やはり安心・安全というのは、地元で、地産・地消といっても、そこにどうい

心・安全があるのかというのとはわからないわけですが、今のような形でやっていただくと、大変いい意味で地域の農作物のブランディングができると思いますので、期待したいですね。

今日のシンポジウムの目的は、三村さんたち地域の方が実際やられていることに対して、我々、外部の者がいろいろと意見を持ち合って棚田をより活性化することです。三村さん、今やっておられる活動についてお話をお聞かせ下さい。

○パネラー（三村建治） こんにちは。今日は、安倍昭恵、総理大臣夫人、また大西市長さんにご参加頂いてうちの団体で稲刈りをしました。大変な応援をいただいて、盛会裏に終わることができました。大変、有意義な一日になったと思っております。そしてまた、今日はこうして皆さんの前で、私たちの取り組みの経緯等をお話しして、できるだけご来場の皆さんに市政方針を理解頂き、それに沿ってこの地域の農業活動を応援して頂ければと思います。そして地域の皆さんには、今の農業活動の市の方向を試みて頂きたいと思っております。

ここで僕がなぜ今、自然栽培に取り組もうと思ったかという、最初の動機についてお話させて頂きます。

話はちょっと前に戻りますけれど、2003年に「米米フォーラム」を油谷町でやった時のことを最初にお話します。そのときにちょうど雨やって、会長の田んぼがぬかるんで、これどねいするかな、こんだけの人が来ておるここに、まともに歩くこともならんようになった。事務局長さんが来られたので、何もなくていいですかいねって言ったら、世界中じゃ当たり前のことじゃから、何にもせんでもええんじゃ。これが自然じゃって言われたから、コンパネをひかないけんかな、テントをまた増設せんやあいいけんかなと思うたんじゃけど、大雨にもかかわらずそのまま一歩を踏み出しました。

米米フォーラムの最後の「種もみの引き渡し式」のときに、たまたま僕の隣の席に女性の方が座られたんです。名前を聞いたら、会長さんの奥さんで、「三村さん、自然栽培の米をつくっちゃあないですか？」と言われたんです。そこで「自然栽培の米ってどんな米ですか？」て聞きました。「いや、それは農薬も肥料も何もやらん米ですわいねっ」。いや、それは普通何か有機栽培とかなんとかいうやないですか。「いや、それとは違いますよ」て言われる。奥さんが言うように、それを食べてみたらわか

るんですかって。「そりゃあ私は食べたらわかりますよ」。米食べてわかるっていうような人がおられますかって言うたら、「いや、私が食べたらわかります」と言われる。どねいして食べたらわかるんですかって言うたら、「私はアレルギーじゃから食べたら普通の米との違いがわかります」。

さらに「こういう体質の他の人に聞くと契約栽培で手に入れているということです。私は栃木県に米を、北海道にヒマワリの油をもう頼んじよる。それで1年中、その米と油を食べます」と話されました。2003年頃、今から12、13年前はこういう風に、アレルギーの人が全国の農家に個人で契約しなければならない社会でした。

市長が棚田の一つの活性化策として、「自然栽培米つくる」と言われたので、どんな方法でできるかと考えていたところ、たまたま農林課から、「三村さん、自然栽培米つくって下さいませんか」と頼まれました。自然栽培の米をどうやって作るかという疑問がありながら、市の政策なので立場上つくらなければいけないと考え、軽はずみにじゃやってみようという返事はしたものの、その一歩が踏み出せないでいました。

自然栽培米というのは、無肥料、無農薬なんです。無肥料、無農薬って、残留農薬があっちゃあいいんってことです。水の問題や周りの田んぼの農薬がかかってはいけないということなので、どこの田んぼが適当かと毎日田んぼに行って考えている内に、2、3ヶ月が過ぎました。

そして、今使っている8アール程度の田んぼをやっと見つけたんです。よし、ここなら耕作放棄してほぼ3年、4年たっちょる。そして、周りにも田んぼは無い。そしたら、僕らがつくっても、すぐ市場に自然栽培米ですよって言うことができる。こんなにええことはないと思って、今の僕らの田んぼをやっと探し出したんです。

作って食べてみてもらいました。自然栽培米というのは食べる人が食べたらわかるんですよ。食べない者は、何ほ食べてもわからないんですよ。（笑声）いよいよリッチな食材なんです。

今は、オーガニック食品ってということで、かなり脚光を浴びています。私たちは自然栽培米を育てる研究で市の職員と何箇所かに行き調査しました。狭い市場だけれども、その世界に入るといろいろな点で、広い世界が広がっていることを実感しました。

○司会（水谷由美子） ありがとうございます。今

日のオーガニックの時代にちょうど対応した形で、自然栽培米を育てているということでございますね。

ここで同じ質問に対して、松浦奈津子さんにはあらかじめご意見を聞いていますので、映像で出演して頂きます。

- パネラー（松浦奈津子） 私は古民家再生をしている団体「一般社団法人おんなたちの古民家」の代表をしています。モデルケースとして古民家再生をしている山口市徳佐は、中山間地域で空き家が多くなっています。徳佐はたまたまお米どころということがあって、古民家再生の延長線上で地域再生に関わり、自然に農業に関わるようになりました。

農業をするということで、4、5年前から下関で農業をしておられる昭恵夫人と一緒に昨年田植えを始めました。動機は地域を盛り上げようという趣旨で、山口県立大学の水谷先生にもお声をかけさせていただきました。私は山口県立大学の出身ですが、現役の大学生の皆さんと同じく、水谷研究室で開発されモンペッコとサロペットを穿かせて頂いています。今日はサロペットを穿いています。

県立大学が開発したこれらの農ガールコレクションを着て、楽しく明るく農業をする女性たちの姿を見て若い男性や一般の方たちもどんどん農作業に興味を持ってもらえたらいいなという趣旨、つまり楽しく明るくファッションブルに農業をするというのがテーマの一つになっております。

田楽庵（徳佐で再生した古民家の名称）を拠点に活動しているので、ここで植えたお米を「田楽米」と命名しました。その成果として、田楽米が2年連続で、東京の大手百貨店で取り扱ってもらえています。

一番のホットニュースですが、この田楽米の新米がとれる時期に合わせて、東京の大手百貨店で、何と2週間、田楽米販売促進ウィークというのが決定しました。こういった成果も上がっております。

田楽米を今年をもっと増やしていこうということで、地域の農業者の方たちと「アグリアートジャパン」という企業組合を設立して、生産量を去年の10倍に増やしているのですが、やっぱりもともと化学肥料を使わずに、有機農法でやっているために課題がいろいろと出ています。ヒエという雑草が生えたりして、たくさん草を取るのも大変です。その辺の人手不足というところは実際にはあって、そこをどういうふうにやっていくかというのが課題です。今年ヒエ取りイベントという形で、ミュージシャン

に来てもらって、田んぼの中で生の音楽演奏が聞こえる中で、歌いながらみんなで楽しくヒエを取ったりしました。たくさんの方が東京などからもあつまってくださり、ヒエ取りも無事に終わり、秋にはおいしい新米が採れました。

古民家再生をし始めて地域との繋がりができて農業をはじめ、たった1年で6次産業まで突き進みました。本日は、高島屋新宿店で県の6次産業開発品として認められた「モチペッコ」を販売しているので、今日は映像出演となりました。昨年秋に田楽米を使用して開発されたお菓子の商品化を選定する会で「モチペッコ」が選ばれてから、非常にスピーディーな展開でモチペッコの全国販売が実現しました。

- 司会（水谷由美子） それぞれの方の農業に対する関わり方、あるいは考え方についてお話を伺いました。

それでは次に、油谷の棚田に注目します。私ども山口県立大学企画デザイン研究室的メンバーは棚田の水に美しい夕日が映え、夜には日本海に漁火が見える、全国のどこにもないすばらしい東後畑の棚田に魅了されています。今後、この美しい風景を活かしながら、地域農業のブランディングさらに6次産業化に向けた活動を応援していこうと考えています。

現在はかなり休耕地が増えてきて、棚田の面積も小さくなってきています。休耕地には木や草も生えてきており、今後の棚田の景観に関しても心配をしているところです。

そこで皆さんに今後の棚田への期待と伺いますか、どういうふうにしていくと東後畑の棚田のブランディングできるかということについて、御意見を頂きたいと思います。

では、昭恵夫人からお願いします。昭恵夫人は岡山県の棚田のグループとも交流されておりますし、何か参考になるようなことをご発言頂けますか？

- パネラー（安倍昭恵） 自然栽培米については、今後、きっと広く認知されていくだろうというふうに思います。今、世界は、明らかにオーガニックを志向しています。その認定などはまだいろいろ難しい課題もあると思うのですけれども、これからは安心して食べられる食材は、ある程度高い値段でも売れるようになっていくだろうと私は思っています。

これからTPPなどの影響もあって海外からいろいろな食材も入ってくる中で、消費者も賢くなって、次世代まで考えたときに、何が本当に安心して食べ

られるものか、しっかり見極めて買うような消費者が必ず増えていくと思います。いいものを作ればきっと売れると私は思っていて、それは一つのブランドと言えると思います。

あとは、今、松浦奈津子さんも言っておられたように、「楽しい」ということが、若い人たちがこれから農業に関わる上で大切だと思います。

岡山県美作市に「棚田団」という人たちがいます。若者たちが大阪から週末ごとに通ってきて、昔は8100枚もあった棚田が後継者不足で荒れ果ててしまっているところに入り込んでいって、その棚田を1枚1枚再生していくのです。みんな素人ですけど。最初は、地元の人たちは、こっそり家の中から見ているのですが、若者たちがちゃんと棚田を再生していくのを見て、むしろ手伝っちゃろうって家の中から出てくる。そして、今はもうお年寄りも、外から入ってきた若者もみんな一緒になって、棚田を再生しているのです。何でそんなに若い人たちが外から入ってくるかという、そこが楽しいからなんです。もちろん農作業は大変ですけども、いろいろな楽しいアイデアを考えて実行しているんです。稲刈りした後の棚田の田んぼの上に、1人1枚ずつ板を持っていって敷いて、音楽をかけて、それまでずっと練習していたタップダンスを、みんなで踊ったりとか、大きなスクリーンを棚田に出して映画を見てみたりとか、自分たちで鹿をさばいてそこでバーベキューをしたりとか、いろんなことをやっています。

若い人たちはみんなつながりを求めています。農業をやるといっただけではなかなか人は集まってこないけれども、例えばヒエを取るにせよ、ただひたすらヒエを取るのは大変かもしれないけど、そこにミュージシャンが入って、ヒエを取った後に音楽も聞けるし、おいしいものも食べられるしということになると、いろんな人たちが集まってくるんだろかなと思います。

これからは、農業とか第1次産業というだけではなくて、自分たちの生き方を、若い人たちが真剣に考えなくてはいけないと私は思っています。

地方の若者たちの中には、都会に憧れ、大都市に出て大きい企業に勤めたい、高層ビルの中で働いてみたい、そんな思いや夢を持って一流大学を目指して勉強しているような人たちもたくさんいて、それはそれで本当にいいことだと私は思います。一方で、それだけではなくて、幸せは意外と身近にあって、

この地域の自然環境であったり、人とのつながりであったり、実はそんなものが宝物であると考えられる若者たちもいると思います。こうした、地域に強い思いをもつ若い人たちのアイデアによって、この地域がどういうふうに進んでいくのか、今から私はとても楽しみですし、もっと実際の施策の中にも若者たちの意見を取り入れて頂きたいと思っています。

私がよく高校生とか大学生と話をしていると、もうびっくりするような斬新なアイデアが出てきます。今までは、まちづくりというのは、男性の「偉い方たち」がつくり上げてきていて、みんなそれに従ってきたと思いますし、それに別に文句もなく、うまくいってきたと思います。しかし、これだけ今、高齢化社会が進んで、地方には若者たちがいない状況の中で、どうしたら若者たちに来てもらえるか、あるいは残ってもらえるかを考えるのは、その当事者である若者でないと、私はわからないと思うのです。

なので、若者たちには、もしかしたら外に出たいかもしれないけど、あるいは1回出て戻ってくるとしても、どんなまちだったら自分たちはここに住みたいだろうか、戻ってきたいだろうかということ真剣に考えてもらいたいと思います。また、大西市長はこうした若者の声を真剣に聞いてくださる方だと私は思っています。皆さん、今日はせっかくお休みのときに市長がシンポジウムに参加してくださったので、ぜひ本気で考えてもらいたいと思います。

その若者たちの意見が取り入れられ、この棚田の魅力が活かされることによって、そこに若い人たちを呼び込んできて、それがまた1つのブランド、ブランディングになるんじゃないかという気がします。

山口県立大学の大学生たちも、一緒になって考えていただければと思います。

○司会（水谷由美子） ありがとうございます。高校生の皆さんへのメッセージが昭恵夫人からありました。今日は朝から秋の収穫祭での稲刈りにたくさん的高校生が参加して下さり、その後このシンポジウムに来て下さっています。皆さんの夢というか、何かこんなふうにしたらいいんじゃないかという意見を後でちょっと当てますからよろしくお願ひします。あっ、授業みたいでごめんなさいね。つい職業病が出まして、ちょっと考えておいて下さいね。よろしくお願ひします。

それでは、当事者の三村さんの前に、松浦さんにビデオで再度参加して頂きます。次の質問、お願ひ

します。

- パネラー（松浦奈津子） 私たちが活動している阿東というのは、中山間地域でお米作りが盛んな所です。私から見たら、油谷の棚田は、海との絶景のコラボレーションがあるので、農業だけに絞るのもいいですが、農業と漁業をうまく組み合わせるということもできるなどと思って、羨ましいです。

やっぱり長門のお魚もすごくおいしいし、お米もまたおいしい、絶景っていうのを組み合わせて、何か新しい商品を作り、全体的に考えて盛り上げていったらいいんじゃないかなと思います。

- 司会（水谷由美子） ありがとうございます。楽しく農業をすることや6次産業化に向けたアイデアが出てきました。それでは、三村さんお願いします。

- パネラー（三村建治） 今、私たちがその次に取り組んでおるのが、やっぱり今から自然栽培をいかに上手につくるかということです。

そのまず一歩として試したのは、種を消毒しないということです。今まで僕は農薬の消毒液に種を漬けたから、匂いも何もなかったんですけど、今回、この米を桶に2週間漬けたら、すごいええ匂いがするんです。どんな匂いかいうたら酒の匂いなんです。これがあるからやっぱり日本酒ができたんじゃないかなと思うんです。

だから、自然栽培っていうのは、もう初めから、種から違うと言うのは言い過ぎですけど、もうそういうもみがらには、そうした小さい菌が生息しておるんです。でも、それを今までは稲としての独自の雑菌というか、イモチ病にしても、それについておるもろもろの病原菌を皆殺して種をまいてきました。無菌の種じゃから芽も出やすいということなんです。今まで農業しよっちゃった人は、皆消毒液漬けたら、多分、酒の匂いは誰もかいじょじゃないと思いますけれど、それが自然栽培のまず一歩です。そこが違うのが自然栽培。

そして、もう一つ今、植えて1カ月ぐらいして、稲がちょっと大きゅうなってくると、今度はウンカが飛び回す。僕は営農組合の会員で、皆で一緒に見たときにウンカがついていて、どねえするほかな、こんだけの束ついちゃったら、稲にならんからって心配でした。でも、これが自然栽培じゃから、いろいろ農薬も何もやっちゃあいけないということやから、しょうがないけん、他の仲間にもお前の穂でもなあし、ええじゃあなか、て言うてやったんですけど。

要はその我慢ができるかできんかです。やから、

個人でやったら、多分これは絶対できんと思いますけれど、僕は営農組合やから、僕の言うた方向で、みんながはあ右に倣えですから、ほうっちゃかな、いけんって言うたら、ほうたっちゃかないけん、あねえせえって言うたらあねえするっていうように。そういうふうに、やっぱ営農組合じゃから、まず自然栽培米の第一歩が、もう滞りなく終わった。

初めの年は、コブが真っ白けになるほどウンカがついたんです。本当、上から2番目の葉まで皆真っ白けですから、刈るときには、稲の穂がついてるだけで、稲の葉はほとんどないです。

そういうような状況になっても農薬をやらない。だから、肥料も当然やらない。これが自然栽培ですから、初めから米を3俵つくって、市長が3万円で購入するって言うから、1反10万円ほどもうけると10万円もうけて、自分で後出した分は、その分から全部還元してやるから、精出して働こうじゃないかという話をしております。要は、普通の米をつくっても、今は1万円じゃから10万円いかないんです。けど、僕らの米はどうにか10万円になるちゅうことで、普通の農業からいうと、農薬代、肥料代を使わんから、その分は儲けになるんじゃないから、どっか問題になる部分があるかいのって言うたら、それからはみんな頑張って、なかなか自然栽培っていいと言いなながら、いろいろ文句言いなながらどうもやっちょるようです。

やはり自然栽培は、初年度は3俵ぐらいやったですけれど、明るる年は4俵で、6反つくって24俵ほど収穫しました。72万もうけた。これ、72万っていいなって言うから、72万でええってお前、やっぱ自然栽培でええって言うことがなけんにかいけんから、それなら、普通の農業よりも一つええってことはなかるうか。みんなが去年になって初めて安心しました。

今年は3年目ですけど、一番大きく変わったのは、みんなが安心してこの自然栽培米の農業に取り組んでくれていることです。というのは、先の不安がほとんど無くなったちゅうことです。自然栽培って、放っておいても、ウンカはつかない、コブも一つひどうなっても実がなる。ただ、ひたすらにヒエを引かないけん。お前らみんなヒエ引かないけんちゅうのは、何かって言うたら、ヒエは稲より大きゅうなるから、ヒエだけはどねえかして引かないけんけど、そのかわり下の雑草はちょっといろいろあるけど、それはまあ小さいから、僕らも面倒や

から、草はつままれにくいんですよ。やから、あれは別に見過ごしてもいいから、とにかくヒエは、引こうじゃないかちゅうことで、4条機械でまた1条空けて、そこを通路にして、両側に手を伸ばして、ヒエだけ引こうということでやってますけれど、やはりヒエはずっと、通年芽が出ますから、なかなか手が切れん。これは、やっぱり自然栽培が一番悪いところ。だから、ヒエだけは何回引いても終わりはないから、できるだけさいさい手で取らんと、これは難しいと思いますけれど。

先ほど言うたように、今年からまず自然栽培で、つくって食べてみて、その結果はきちっと報告してくれよっていうことで、会員に15キロほど米を配付しました。その情報を広く皆で共有するために、自然栽培のええところを皆さんで話し合い、今年中に互いに意見を聞かせていただこうと思っております。

自然栽培米がおいしいとかおいしゅうないとかってというような、いろいろな話があります。自然栽培ってというのは、どっちかっていうと、養分が豊富でない土で作っている点が今までの米との違いです。

けれど、食べてみると自然栽培米は、口当たりがやわらかいって感じがしますね。そしてあんまり飽きもこないです。僕は周りの人からおいしいかって言われるのだけど、そんなにおいしい米じゃないよって言うちゃあおるんです。（笑声）要は何かという、今、みんなご飯食べよっても、おかずに味を持ちよるんですよ。米の味ってというのは、米を大事にして食べてる人、多分、あんまりおっちゃんないと思うんです。みんな、食べちゃっても、おかずの味でみんな食べよってやから。けど、僕らみたいなご飯の味で食べる者は、それは米の味がわかります。

お米の味を大切に食事をするようになると、自然栽培米の味も自然にわかるようになると思います。

こうした取り組みの他にもう1つあります。僕らが1番初めにイベントをしたのはアストラゼネカという会社で、一緒に稲刈りをやったんですよ。ちょうど震災の年になって中止になったんですが、それまで3回やりました。

会社の方からそのときに初めて一緒に食事をしようと言って、向こうが持ってきたお弁当を食べたり、ゲームをやったりして仲よくなりました。それから、今日のように、皆で米を15キロ炊いて、むすびを120個ぐらいつくることできるようになりました。

そのぐらいよくやっけていけるようになりましたから、かなり集落の中の風通しがよくなって、仲間のムードもがらっと変わってきました。初めの頃は半分くらいがついてこなかったのですが、今では3分の1ぐらいはまだよそ向いておるのもおりますけれど、（笑声）、3分の1が、やはりこっちを向いています。よそを向いているものを皆、引っ張っていけないので、足引っ張られんように、静かにしちよってこれて、言っはおります。（笑声）

こうした営農組合は収支の考え方を持たにゃいけんところじゃから、相談をしちよるような時間は無いんです。ああじゃこうじゃ言ううちに、すぐ半日が経つんじゃから、遊びになるんじゃから、方向を決めたらその方向にさっと向いて同じ仕事ができるような集団でないと、営農組合をつくっても時間の無駄です。やから、現場じゃあできるだけ要らん話はするなど。（笑声）そして、同じ仕事が終わったら、さっさと帰ろう。目的のとおりにせんにゃいけんことじゃから、私たちの集落の中で、今から営農組織つくろうと思われるところは、3分の1は切り捨てて、（笑声）3分の2で前向きにいかれんと、昔のように集落全部をまとめるちゅうことは、ちょっと難しい時代になりました。

以上です。

○司会（水谷由美子） いろんな姿勢があって地域コミュニティにも問題はあつたものの、やはり最後は地域で賛同された方のコミュニティが農業の新しい取り組みを支えているというお話でした。また、自然栽培米をつくるというのは、普通の農業の米つくりと違いますから、毎年の積み重ねをきちっと記録していただくといいかもしれません。その発見が、6次産業化していくときのストーリーになっていく、キーワードが生まれてくるんじゃないかなというふうに、今伺いして思いました。

それでは、市長のお立場から、応援する体制についてお話し頂けますか。

○長門市長（大西倉雄） 私は、県会議員のときに、一般質問に立つたびに、いわゆる棚田百選のところを、毎回調査をして現状を発表しておりました。その頃、三村さんは油谷の農林課長でございましたね。今言ったように県会議員の頃から私は棚田に対する思い入れは強いものを持っていました。棚田でどうしたら生活が成り立つかというようなことの中から、自然栽培に取り組むという提案もございましたので、これを絶対やらにゃいけないと思うようになりました。

た。

作ったものをどうやって売るかということでございますが、先ほどちょっと申し上げましたけれども、売る会社をつくりました。「ながと物産合同会社」というのを、市と農協と漁協そして養鶏組合が一緒になって会社を設立いたしました。

その会社で販売する長門市の産物は少量多品目なんです。量がまとまってるというのは米ぐらいしかないんです。そして、とれた魚は皆市場へ出す。市場へ出すから、売れん魚、せっかくいいけれども、売れない魚もあるわけです。それは、漁家がそのまま沖で、邪魔になるから捨ててくるという実態があるわけでごさいます、やっぱりこれらをお金にする方法をということで、会社を創ったんです。

この合同会社の社長、いわば経営責任者を全国公募して112人の応募が全国からございました。その中で、プレゼンをしてもらったり、レポートを出してもらったりした中で1人を選抜しました。今日はきていますと思います。長門の産品を売る役割を果たすということですから、さっきありました3万円で営農組合から買いますと、3万円で買ったものをきっちり売りますという仕組みをつくるんです。

今できつつありますし、3万円で実際買っていますから、やっぱりそのことによって、農家は所得の向上につながります。また漁師さんにとっても、とれた魚が高く買ってもらえる仕組みを創るわけです。今まで捨てていたようなものも、使い方ができますよという提案をすることによって、それが市場の価格を決めてもらえるようになってきつつあるわけでごさいます、そういった取り組みをしっかりとしていくということがまず一つと考えています。

そして今日も向津具半島からお客様が来られてますけれども、今、向津具半島に、移住をしてくれている若い人がたくさんいるんです。これは、仕掛け人もいます。百姓庵の井上君夫婦が様々なところで、向津具はこんないいところですよということを発信してくれているんです。それを頼りに来られる方がたくさんいらっしゃるわけでごさいますけれども、その中で、井上君夫婦からも提案を受けているのは、向津具半島をいわゆる自然栽培の基地として宣言してくれと。基地ちゅうのは私も早くから言ってますから、とにかく宣言してくれと。そうしたら、全国でそういったことをやりたいと思ってる人たちが、間違いなく来ますよという話を伺っております。

私は、そういう面でいうと、確かに向津具半島が一番高齢化、宇津賀もそうですけれども、高齢化がもう50%になろうといたしているところですけども、そういうところに若い方々が移り住んできて、そこで農業を始める、あるいは漁師を、それを聞くと、海女さんになりたいという人もかなりおられるということでございます。そういう意味合いでいうと、定住対策にもなると思っております。

やっぱりそういう取り組みを一貫して進めていくことで、全国に発信していくことが大切です。長門市は向津具半島を中心として中山間地域が多いわけです。全国へ向けて地域の魅力を発信していけば、間違いなく私は長門の農業も変えられると思います。若い人たちが働く場がないという話はよくありますけれども、そういう取り組みをすることによって、また全国から違った人たちが来てくれるようになると思っております。

そしてまた、今、地方創生が叫ばれている中でありまして、国のまち・ひと・しごと創生本部の中で、長門のこの合同会社の取り組みが、全国にモデルとしてたびたび紹介をされております。紹介をされているからしっかりせんにゃあいけんちゅうことじゃあございせんけれども、全国でモデル事業として言われているわけですから、ながと物産合同会社もしっかりとした運営をしていきたいと思っております。先ほども申し上げました、農家、漁家の所得向上に何とかつなげていき、そして、暮らしている人たちが、生き生きと笑顔があふれるような地域にしていかなきゃいけないと思っております。

これはすごく大切なことですが、さっき三村さんから最後に出ましたように、地域コミュニティーとか集落機能が極めてもう低下しています。限界集落という聞きたくない言葉もありますけれども、やっぱり集落の中でお互いに助け合う組織をどう創っていくのかということが課題です。

今まで自治会の中では、お葬式が出て、手伝う人もいないということをよく聞くわけでごさいます。集落の機能をどう再生していくかについて、移住されている若い方々の知恵や力を借りていく必要があると思っております。

○司会（水谷由美子） 大変盛り上がってきて、あと時間も17分で、3つ目の質問などしたいと思います。徐々に今後の方向性が見えてきたように思います。

では、最後の質問は、6次産業化についてです。

この後、会場の皆様にも聞いてみたいと思いますけれども、まずパネラーに油谷の棚田の自然栽培米や油谷の産物を使った6次産業化についてどんなアイデアがあるかお伺いします。ここではあまり現実性を考えないで、夢というイメージでお話ししていただけたら結構だと思います。まず、昭恵夫人からお願いします。

○パネラー（安倍昭恵） そうですね、今、市長から百姓庵の話が出ましたけれども、百姓庵の人たちは、移住して、すばらしいお塩をつくっています。彼らを目当てに、本当にたくさんの方たちが油谷町を訪れ、移住者も増えていて、実は外国人の方たちもすごくたくさん、井上さんのところに来られている。油谷町は住んでいる方が思っている以上に魅力的なところなんです。

6次産業化をして、商品を出していくことも大事なんですけど、私は、多くの人たちにここに来てもらって、実際にとれたてのお魚やとれたてのお野菜を味わってもらおうというのが、本当は一番この活性化につながるのではないかと考えています。今、日本を訪れる外国人の数がどんどん増えています。東京や京都や北海道などはものすごく増えていて、この山口県も徐々に増えていると思うんですけども、まだまだ油谷町で外国人を見かけるということは、あまりないのではないかなと思います。

例えば、中東のお金持ちの人たちは、ヨックモックというお菓子の新商品を買うためだけに、プライベートジェットで日本に来たりするんです。その場所が近いか遠いかとかは関係ないお金持ちというのが、世界中にはたくさんいます。そのお金持ちだけを相手にするのがいいというわけでもありませんが、いいものをつくれれば、魅力的なものをつくれれば、遠いとかそんなことは全然関係ないんです。むしろ辺鄙なところにあるぐらいのほうが、喜んで来る人たちもいるので、そういうところを個性として利用したほうがいい。

美しい自然があるのだから、私は、人工的な看板とか、そういうものをなるべくなくしたほうがいいと思っています。都会と同じようなものをつくらうとか、都会のちょっと小型のもので、若者を呼び込もうという、そういう発想はもう古いと私は思っていて、むしろ、本当のど田舎ってところを売り出す。そのほうが絶対、若者たちや都会生活に疲れているような人たちに響くと思います。また、日本だけではなくて、世界中にも、何かちょっとオ

リエントルであって、少し自分の国とは違うような、癒されるところに来たいという人はたくさんいると思います。

日本を訪れる外国人は既にたくさんいるので、東京や京都だけでなく、いかにこの油谷町あるいは長門市に呼び込むかということ、特に若い方たちの発想で、今までとは違った切り口、視点で考えていっていただくと、きっと油谷が世界の人たちに知っていただけるところになるのではないかなと思います。自然栽培米もあるし、棚田の美しい景色もあるし、おいしいお魚もあるし、そして、あそこに行くのと癒されて、楊貴妃の像もあるし、観光地もある。

今までのような企業誘致をしても、私は、もう若者は来ないのではないかなと思います。これまでとは違う職業もたくさん出てきています。若い人たちがインターネットを使って、田舎に居ながらもできる仕事もたくさんあるし、そういう仕事をしながら農業をして、おいしいものを食べる、最先端の仕事しながらスローライフを楽しむというのが、私は、これからの一番格好いい生き方になるのではないかなと思っています。

○司会（水谷由美子） スローライフというキーワードをいただきました。

私は今朝、井上さんのフェイスブックを見たら、1カ月に12組も向津具半島に移住してこられたということが報告されていて驚きました。長門市はすごいことになっていますね。田舎度の高さが魅力であり、それをもっと磨いていくことにヒントがあるのでしょうか。

それでは、お米を使って6次産業化を試みていらっしゃる松浦さんに、現状を報告してもらいます。

○パネラー（松浦奈津子） まず私は、阿東のお米作りに取り組む中で、お米の消費量を上げようということで、お米自体だけでなく気軽に食べられるもの、つまり加工品を作る計画を立てました。そして昨年からは6次産業商品をつくっています。

まず1つが、大学の皆さん、経済部の皆さん、そして大西市長様にも来ていただいて、品定めや命名をして頂き、「モンベッコ」を穿いて植えたお米でつくったお餅の菓子「モチベッコ」です。本年度、田楽米はモチベッコのお餅にしか使わないので、もっと消費を上げるために、コシヒカリの田楽米をお酒に、さらに米粉にして加工品を作りました。ブランディーケーキみたいな感じで、この酒を染み込ませる和酒ケーキっていうのをつくって、それが6

次産業商品となったんです。地域間の連携ということで、今回のシンポジウムの1回目（アグリアートフェスティバル2015）の時に、いろんな皆様ともお話ししました。長門の大西市長様と、長門のゆずきちと一緒にコラボレーションできないかという提案を受けて、1回目のシンポジウムの後に具体的に進めていったところ、実際にケーキ、和酒ケーキに長門のゆずきちを入れたケーキっていう、プレミアムケーキをつくることになりました。それが今度、大阪の大手百貨店のプレミアムカタログに載ることになって、まさに地域間連携が実現し、そのシンポジウムにもものすごく感謝しています。そういうように地域地域で考えるだけでなく見るんじゃなく山口県全体をつなげていって、6次産業商品を日本、世界に発信していけたらいいんじゃないかと思います。

- 司会（水谷由美子） ありがとうございます。こういったシンポジウムの出会いから、地域連携が生まれたことは嬉しい限りです。去年のちょうどファッションショーの次の日に、昭恵夫人、大西市長そして私が松浦さんの主宰する田楽庵に行きました。そこでおんたちの古民家が開発したお菓子を何種類も頂きながら、品定めをして、「モチベッコ」が選ばれて商品化されました。そしておんたちの古民家のメンバーが今日は高島屋でそれを売っているんです。まさに夢が現実です。ちょっとその現場の映像を見ていただきます。

この映像は今朝、新宿高島屋の開店前に現場で撮影され送られたものです。

しばらくちょっと映像上映に時間がかかるようですので、少し私が話しておきます。この前は博多阪急でも販売しておられました。とにかく今、山口からどんどん攻めの発信を、つまり山口と長門などいろんな地域のコミュニティーをつなげた商品開発の発信も軌道に乗り始めているようです。

それでは、先ほど大西市長が紹介されたLLCですか、そちらの社長をしてらっしゃる山本さんが会場に来られているので、現在取り組まれていることについてお話して頂けますか。映像が出るまで簡単にお話をして頂ければと思います。

- ながと物産合同会社（山本桂司） 先ほど紹介ありましたながと物産合同会社の山本と申します。

先ほど、パネラーの皆さんのお話も聞きながらなんですけれども、私どもの会社のほうで、自然栽培米に関してどういった動きをしているかという報告もさせていただこうとは思っています。

昨年度、東後畑営農組合さんがつくっていただいた約100キロ強の、少ない量ではございますけれども、販売方法に関しましては、取引のある料理店さんのほうへ発送させてもらったり、個人のお客様の注文を受けながら発送させていただき、めでたく完売いたしましたところではございます。

その後、いろいろ売り込みをかけていたところなんですけれども、市場はいかにも冷静なんだということが一つ、答えとしてはありました。

例えば、自然栽培だから、生産者がどうだから、産地がどうだからといったことは、やはり当然大事ではあるんですけれども、最終的な要因としては、おいしくなければ続かないということなんです。こういった自然栽培米を産地化しようという取り組みに関して、高い評価をいただくことは多々あったのですが、やはりそれが継続的な購買を生み出すエンジンとしての機能になるかどうかは、むつかしいです。おいしい、だからリピートがある、それを継続的に続けていこうよというふうな仕組みがいまいち希薄だったんじゃないかなということも、私どもは痛感させられた部分でございます。

おいしいものをとにかくつくろうよといったところで、1人の生産者の方とお話しさせてもらったときに、この方はお米の農家さんだったんですけれども、よくこの地域でも、当然ほかの地域でもあることなんですけど、農家さんって、自分でつくった米を食べない人がいらっしやるみたいですね。全てJAに出荷するから。もしくは、他の人がつくったお米を食べたことがないという生産者がいらっしやるということを知りました。

例えば、日本で一番おいしいと言われているのは魚沼産コシヒカリ、御存じですよね。これを食べたことがないのに、どうしておいしい米に近づけられるんだろう。もしくは、自然栽培で名を馳せている各地の米を食べ比べてみたことがあるのかな。私は、食べました。やはり市場を知りたかったので。知った上で、自分たちの米がまだまだだということも痛感しました。

なので、今後はより一層おいしい米をどんどんつくっていける、これは、米に限らず、野菜にしても、魚にしても、肉にしてもそうです。いかにおいしいものをつくれるかが、我々が考える消費地である大都市で勝負するのに一番大切な要素であって、欠けてはいけない要素ということが一番生産される方には訴えたいなという気持ちではあります。

なぜならば、この地域でかけっこが速い子が、オリンピックでは絶対に勝てないんです。県で一番足が速い人でも日本一にはなれない。日本一になった人が初めて勝負できる世界がある。皆さんにはこの小さな小さな長門市だけで満足できるような商品をつくってほしくないっていうのが、僕たちの本音なんです。あくまでこれは、大都市で売るとい話になりますけれども。

なので、誰よりもおいしいものをつくってやるんだという生産者の矜持が一番必要なんです。みんなから出てくるエナジーみたいなものを作物にもっと反映してほしい。

かつ、お米に代表される水稲栽培、これでも一種の間違ひがあつて、これは行政を批判するわけではなく、そういった制度を批判するわけではないですけども、やはり守ろうとする余り補助金というものが発生します。この補助金を大前提とした事業化というのは、あながち懐に入るお金としては一緒だからということではあるかもしれないけど、それがなかったときに事業化が成立するかどうかなんです。自分たちがつくったお米だけで、自分たちが生きていけるかどうかということです。しっかりと商売できるような、そういった目線でものをつくっていくことが大事なんじゃないかなということが、この1年、自然栽培米を通して学んだことです。皆様のところでも、少しでもそういった気持ちがあつていただければと思いますので、よろしくお願ひします。
(拍手)

- 司会 (水谷由美子) ありがとうございます。大阪から来られたと聞いていますが、なぜ応募されたのか、お聞かせていただけますか。
- ながと物産合同会社 (山本桂司) 112人の中から、めでたくというか、運悪く選んでいただいたんですが、(笑声) 単刀直入に言うと、前職ではそれなりの知恵が要る商売をさせていただいていました。このままいけば定年まで安泰だろうなっていうのが一番あつたんですけども、何かこう漠然とした、楽しみみたいなものが感じられなかったんです。こちらの会社の募集内容を見た限りですが、何て楽しそうなんだろうと思ひ応募しました。

具体的に言うと、自分たちがやったことが、必ず地域のためになるということが、手ごたえとして感じやすい立場だからということになります。大きな歯車の中で、少しだけ商売しただけではなかなか会社のために貢献できているかどうかというのが実感

できないむなしさみたいなの、社会人になるとやっぱりあります。実際、そういうのを感じたっていうのが、地域のために、多少きれいごとではあるかもしれないけれども、そういったものを自分の手柄として、自分だけの手柄じゃないんですけど、体験できるのは楽しいんだなって思えたということなんです。

- 司会 (水谷由美子) ちょっと、思い描いてたものと若干違つたっていうか。(笑声) シリアスになりましたね。
- ながと物産合同会社 (山本桂司) コメントは差し控えさせていただきます。(笑声)
- 司会 (水谷由美子) どうもありがとうございました。(拍手)

大阪から来て下さり、ビジネスとしてやっておられるスタンスと、農業として米を作る立場で、ちょっとずれみたいなどころがあるようですね。今はまだぎくしゃくしているようですが、徐々に気持ちの触れ合いができて、いい方向に向かっていって頂けるように期待しています。

それでは映像が繋がりましたので、ご覧下さい。

この映像の右手2人がおんなたちの古民家です。左の方は、宇部のロイヤルさんというお菓子をくつてらっしゃる人です。モチベッコを開発した3人です。

- パネラー (松浦奈津子) それでは、おんなたちの古民家と、「ゆずきち」(長門特産の柑橘類)のコラボ商品をつくったメンバーを紹介します。まず、この商品をつくってくれるケーキ屋さんです。
- (ロイヤル) よろしくお願ひします。非常においしい香り高いケーキなんで、本当につくるときも、強い見方が入つたなという風に考え、頑張っています。これからどんどんゆずきちをやっていきます。
- パネラー (松浦奈津子) そして、この商品の企画販売をプロデュースしているおんなたちの古民家のメンバー原亜紀夫さんです。
- (原亜紀夫) 先日、大西長門市長と御商談させていただいて、今年は、市長は太鼓判押すよっていうことで。
(ビデオ中断)

- 司会 (水谷由美子) 続きは私が見ておりますので言っておきますが、一緒にコラボをしながら商品開発を進めていることに、彼は大変感謝をしております。このような地域間の出会いなど、昭恵夫人を通

じて、いろんな出会いをつくっていただいております。本当にありがたいと思っております。ありがとうございます。

皆さん、今日ここにきていただいたことで生まれた出会いが、また次のクリエイティブに繋がっていったらいいと思います。農業には楽しさと同時に苦しさもあるのですが、新しいものやおいしいものを目指す楽しい農業をどういうふうに進めていけるかということを考えるために、今回のシンポジウムを企画させて頂きました。

子どもは、今パネラーが穿いているモンペッコを皆さんにぜひ穿いていただいて、ファッションブルに楽しく農業をやっていただくと、田園の風景としても、何か若々しさが感じられますし、「あっ、農業は楽しいかも」というふうに高校生の皆さんにも感じてもらえるといいなと思います。高校生の方に夢というか、農業への思いを聞いてみましょう。

○(高校生Aさん) もっと長門市をアピールしていったらいいと思います。

○司会(水谷由美子) 発言ありがとうございます。(笑声) ごめんなさいね、急に当てて、失礼しました。

ということで、映像準備はできましたか。お願いします。

(ビデオ上映)

○パネラー(松浦奈津子) こんにちは。今日は会場のほうに行けなくて、本当に申しわけございません。今日から1週間、新宿の高島屋で、山口県の6次産業として認められたモチペッコのアピールをします。

こちらになります。山口県の農業の魅力を発信できるよう頑張ります。よろしくお願いします。

(ビデオ終了)

○司会(水谷由美子) 今日は欠席して申しわけないということで、現地から映像を送って頂きました。

ちょっといろいろ不手際があって申しわけなかったと思います。

それでは、もう時間が来ました。最後に今後のこの地域の発展のために、楽しい農業の推進や油谷棚田の農業文化の継承などについて、一言ずつ期待の言葉をお聞かせください。では、昭恵夫人からお願いいたします。

○パネラー(安倍昭恵) 時間もないので一言。油谷は、高齢化が進んでいるとはいえ、本当にすばらし

い環境があり、可能性は無限大だと思っています。私の夢は、油谷町の中を馬で歩き回ることです。そんなことを思っていたら、百姓庵の井上さんたちも、エコツーリズムを馬車でやりたいと言っておられました。ほかにはないことというのは、多分そういうようなことなんだろうなと思うんです。

いつか、みんなが馬に乗って、あっちこっちに行ったり、馬車が行きかっていたり、そうすると、海外の人たちも、ああ、おもしろいところだなと言って来るんじゃないかなと思います。これから油谷町はどうなるのかと、私はわくわくして見ているところです。市長、どうぞよろしく願いいたします。(拍手)

○長門市市長(大西倉雄) 私は、今のお話はしっかり受けとめさせていただいて、違った観点からちょっとお話を申し上げておきます。6次産業化の話ですが今、ながと合同会社を中心に、さまざまな商品開発を、例えば、肉あるいは魚を使ったものや野菜などを製造する施策を作っていこうと思っています。さらにそれらを売ることもできる施設です。

いわゆるラボというか、研究所をつくりたいとも思っています。市民の皆様方に、ぜひさまざまな形の商品開発に活用して頂いて、平成29年に仙崎に作る道の駅でしっかりと売っていく。それぞれ長門で喜ばれたものを全国に発信をしていける、そういった取り組みをしていきたいと思っておりますから、何とぞよろしくお願いを申し上げます。(拍手)

○パネラー(三村建治) 僕たちの集落は、市内の中では、皆さんよりもちょっと一歩、半歩ぐらい先を進んでおりますけれど、今年、やっと、さっき話したように、集落の中でどうにかこうにか男性と女性のコラボができて、お客さんと呼んでも対応できるようになりました。ですから、今度は私たちの集落に続く次の集落に応援をしていこうと思っております。ぜひ、市長が言われたように、自然栽培米が入ったら、かなり可能性があるんじゃないかという希望を私は持っておりますから、希望を求めてどんどん進んでいきたいと思っております。また今後ともよろしくお願いをいたします。(拍手)

○司会(水谷由美子) 皆さんありがとうございます。この1時間ちょっとの話し合いの中で、地域内ではいい自然栽培米をつくりビジネスでしっかりと売っていくという方向性が出てまいりました。そして道の駅が作られ6次産業化により作られた商品をそこでどんどん売っていくという具体的なプランも

発言されました。

また一方で、向津具半島だったり、宇津賀地域だったり、移住者もたくさん来ておられることも共有できました。これらの人がなぜここへ来るのか。オーガニックな生活に注目が集まっている世界的傾向の中で、スローライフやオーガニックライフを求めて来られる、つまりそういう趣向の方々を受け入れるいい環境が、この地域にあるということですね。

だから、そういうことをより磨いていくことによって、単なる見て回る観光の場所ではなく移住の地になってきていることもわかりました。そしてスローライフとか、エコツーリズムを実現できる場所としてどんどん磨いていくと、自然栽培米を育てていることとつながって行って、地域にもっと希望が持てるのではないかと思います。

そのために、今日来て頂いた皆様が、その担い手になって頑張ってもらえば地域の夢が実現できるのではないのでしょうか。私どもは農業をやったことがなかったのですが、昭恵夫人のお誘いで今年は既に稲刈りを2回もしました。ちょっと腰が痛いですが、実際にやってみて楽しさが感じられました。田植えや稲刈りをしてみて、そういうときの服装も本当に大事だと実感しています。モンペッコと揃いのTシャツを着て作業をすると、田園風景に新しい活気ある風景が生まれます。

農業者もそうでない人もそういう風景を視覚的に楽しめることで、活性化ができるような活動もやっていけたらと思います。そして、最初に学生がプレゼンテーションで提案させていただいたように、お祭りの復興みたいなものが、より自然栽培米をみんなで盛り上げてやっていくコミュニティーの復活あるいは活性化に繋がるのではないかと思います。あるいは、また隣の集落っていいですか、他のコミュニティーとのつながりも、そういう祭りを通じてやっていくとか、何かそういう人の心と心をつなぐようなものも大切にしていけることが重要ではないでしょうか。

ビジネス面からだけでなく、農業文化からもアプローチすることも農業振興に有効ではないでしょうか。たとえば祭りでの芸能なども復興していただくことはどうでしょうか。今日は山口県立大学理事長が来て御挨拶したように、大学も地域にいろんな形で貢献していきたいと思っております。できることにも限りはございますけれども、私たちも、本当に美しい棚田に魅了されております。その魅力が単に

風景に終わるのではなくて、皆さんの暮らしが楽しくて、また外の人とも交流できるキーになることが必要です。

本日は、本当にお忙しいといいますが、シルバーウィークの最後の日に、こうやってたくさんの皆様が集まって頂いて、本当にありがとうございました。（拍手）

そして、昭恵夫人、大西市長そして三村様に拍手をお願いします。（拍手）

それでは、皆様、お気をつけてお帰りください。どうもありがとうございました。（拍手）